

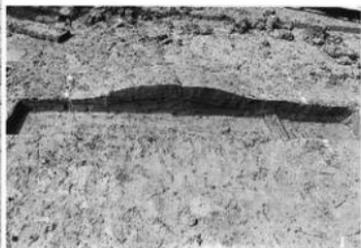
3 調査区第1面東部 (北から)



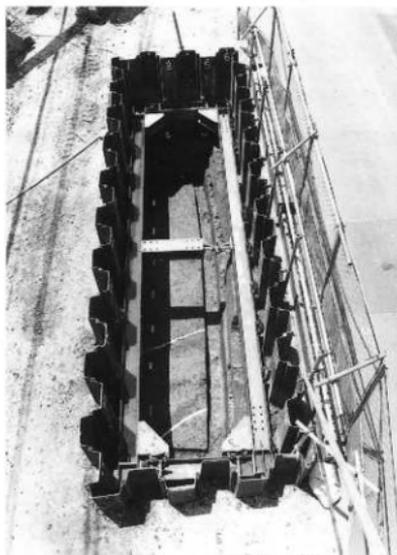
3 調査区畦畔115 (南西から)



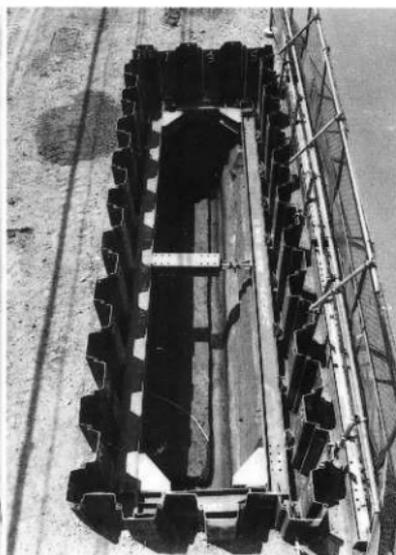
3 調査区畦畔106断面⑦ (南東から)



3 調査区畦畔106断面⑧ (南から)



5 調査区第1面 (北から)



6 調査区第1面 (北から)



5 調査区畦畔116 (西から)



6 調査区畦畔117 (北西から)



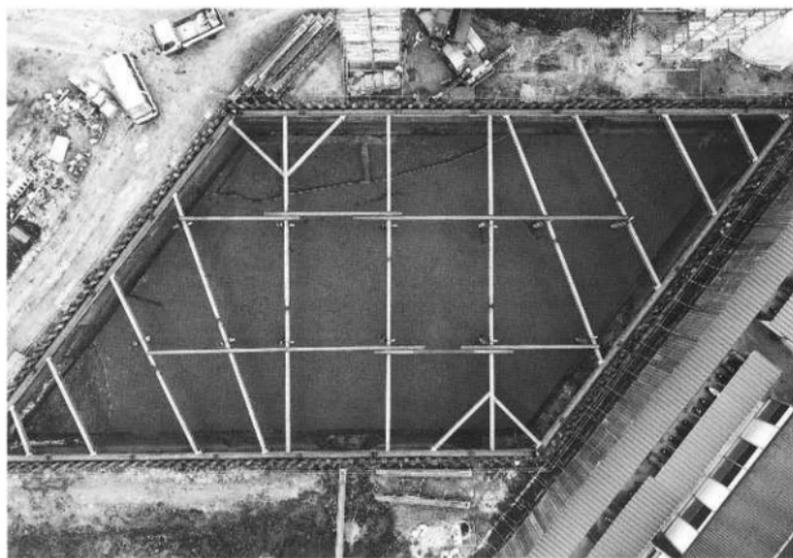
5 調査区畦畔116西壁 (東から)



6 調査区畦畔117南東壁 (北西から)



1 調査区第2面 (上が北東)



2 調査区第2面 (上が北西)



2調査区第2面（北東から）



2調査区NR201・SA201（北東から）



2調査区SA201（北東から）



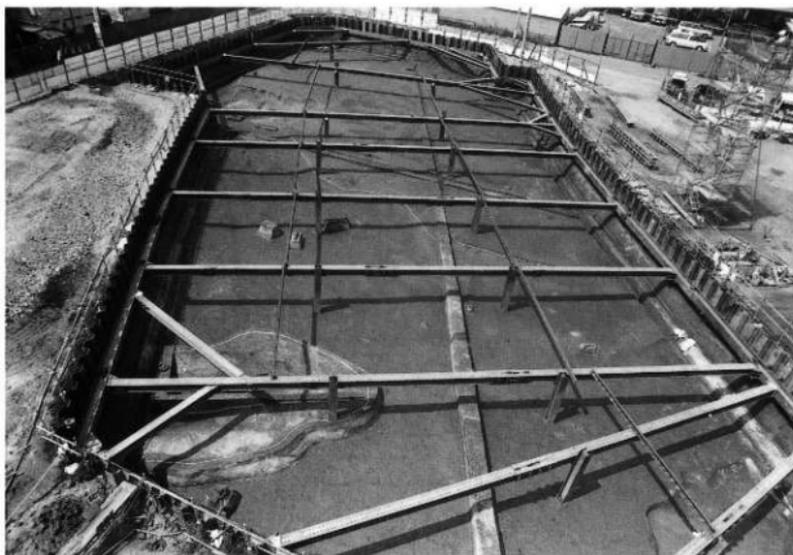
2調査区SA201〈杭1～3〉（南東から）



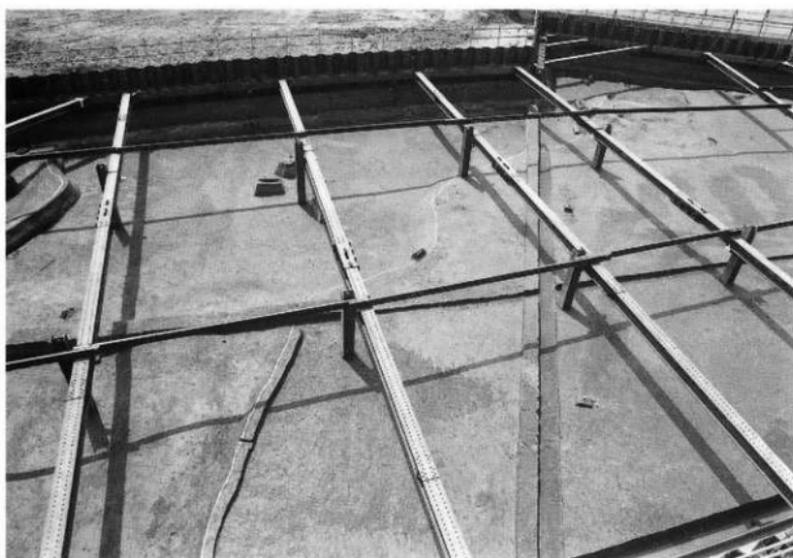
2調査区SA201〈杭7～18〉（南東から）



2調査区NR201土器(17)出土状況（西から）



3調査区第2面（北東から）



3調査区N R201（北から）



NR 201遺物 (15・23) 出土状況



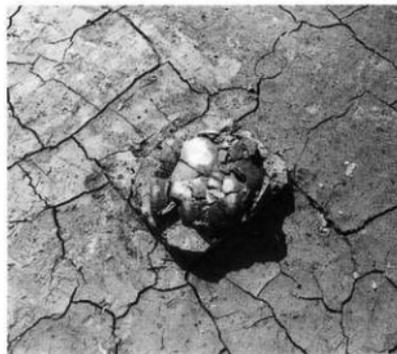
同 (20) 出土状況



同 (16) 出土状況



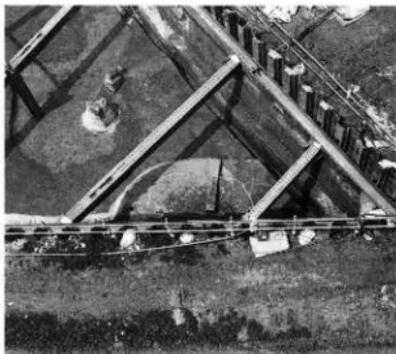
同 (22) 出土状況



同 (18) 出土状況



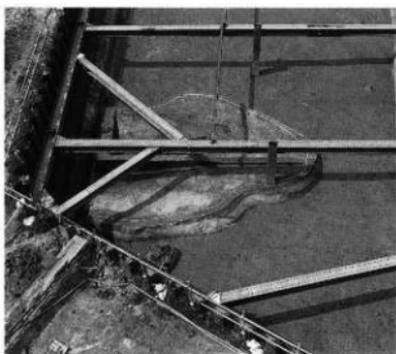
同 (21) 出土状況



3 調査区 S K 201 (東から)



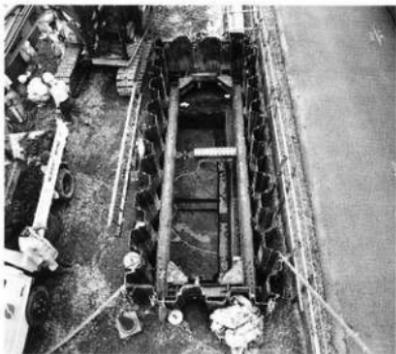
3 調査区 S K 201土器 (3) 出土状況 (西から)



3 調査区 S K 202 (東から)



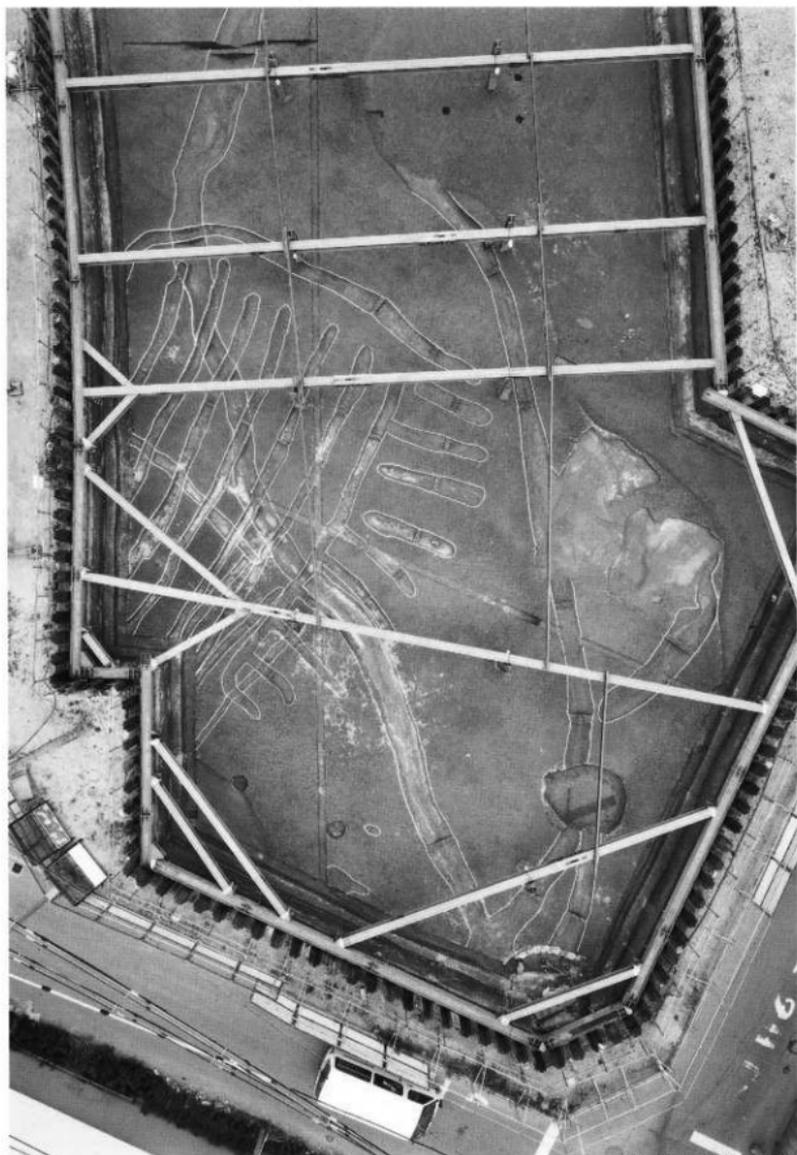
3 調査区 S P 201東壁 (西から)



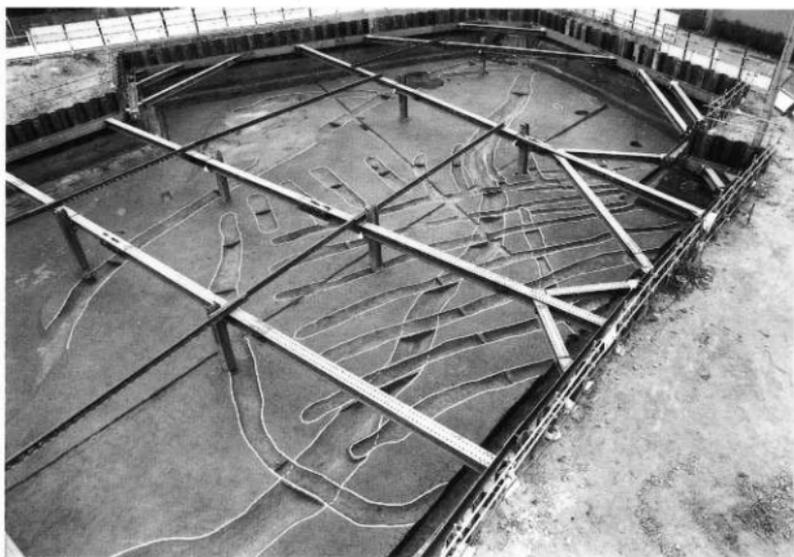
7 調査区 S K 203 (東から)



7 調査区 S K 203 (西から)



3調査区第3面(上が北東)



3調査区第3面（北東から）



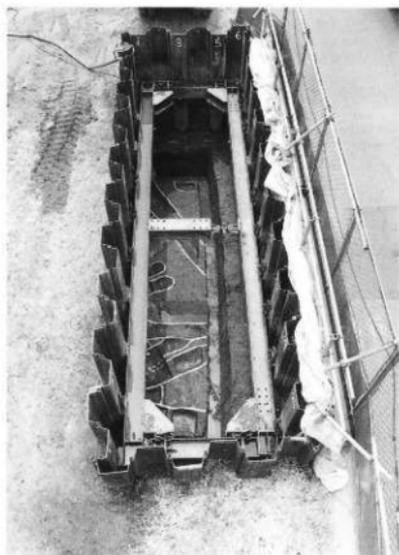
3調査区第3面（北東から）



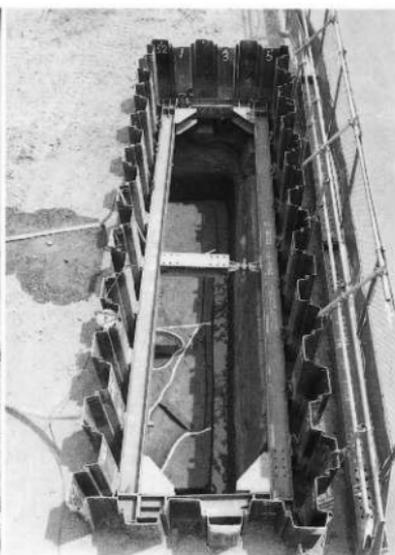
3調査区S D 303土器 (31) 出土状況
(北から)



3調査区S D 321土器 (33) 出土状況
(南から)



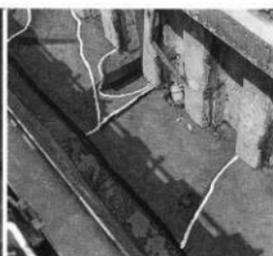
5 調査区第3面 (北から)



6 調査区第3面 (北から)



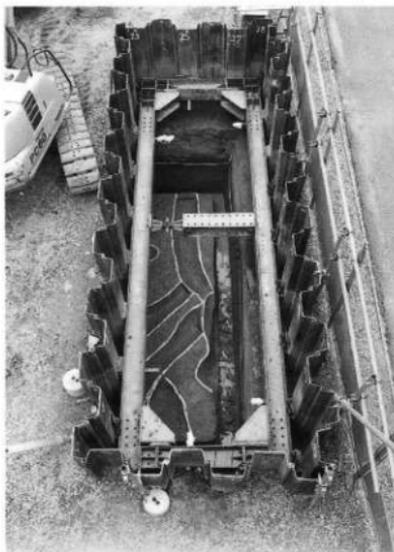
5 調査区第3面北部 (西から)



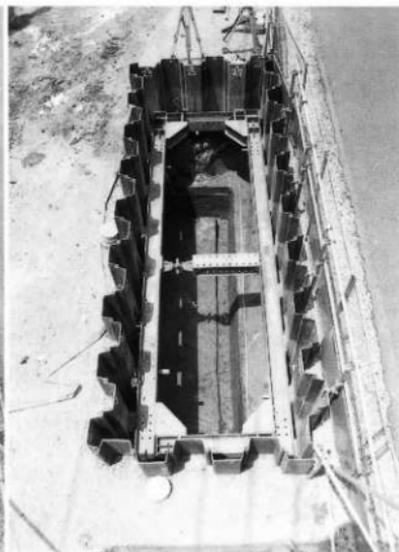
6 調査区第3面 (南西から)



6 調査区S K 301 (南から)



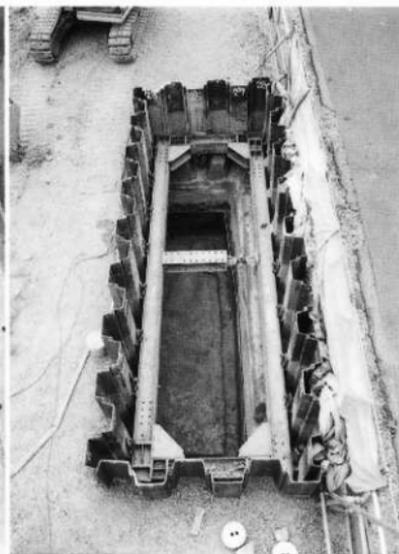
7 調査区第3面 (東から)



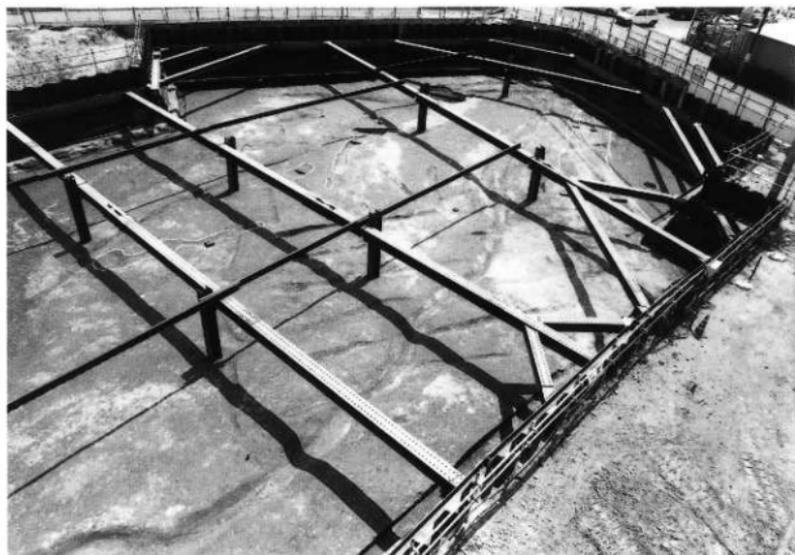
8 調査区第3面 (東から)



7 調査区第3面 (西から)



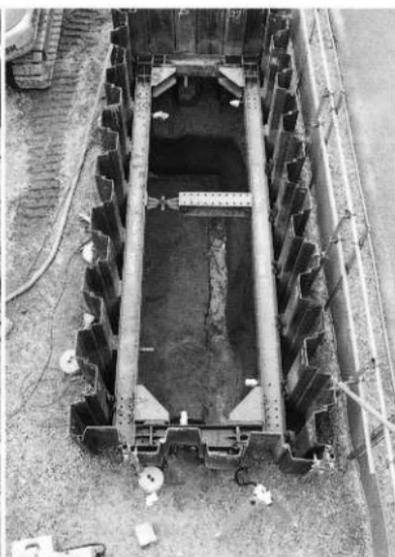
9 調査区第3面 (東から)



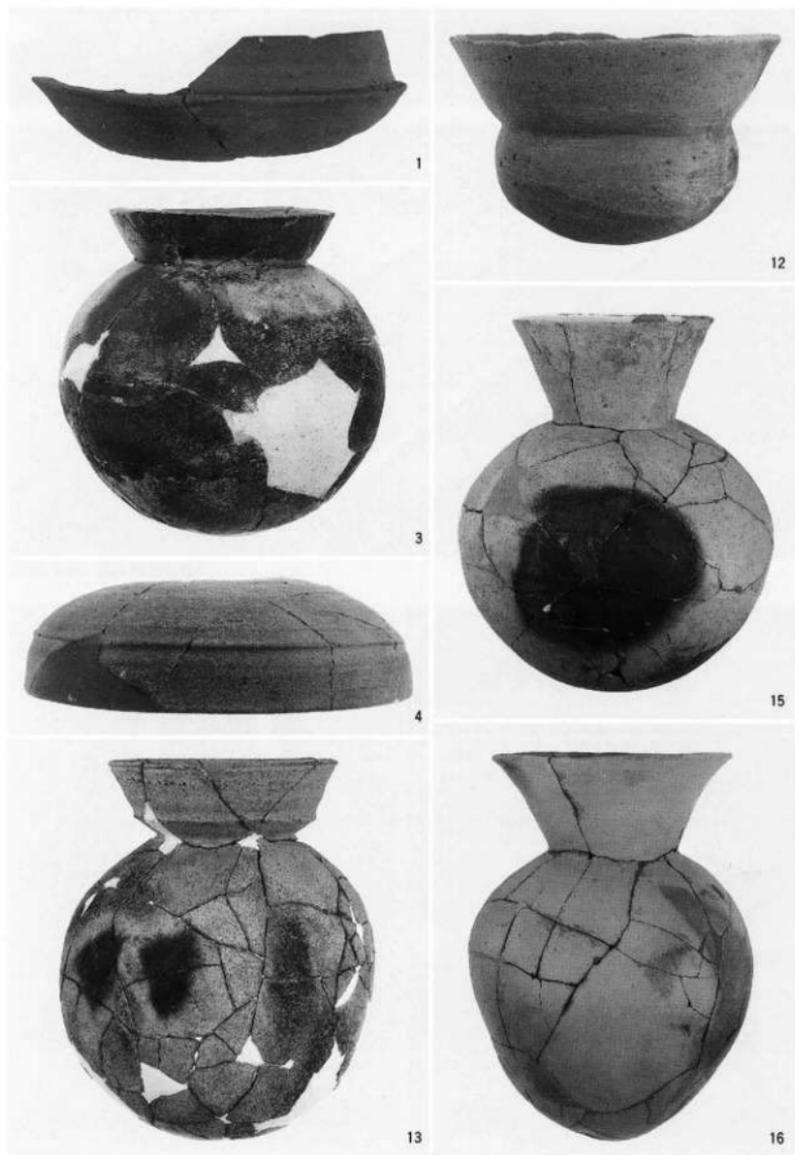
3調査区第4面（北東から）



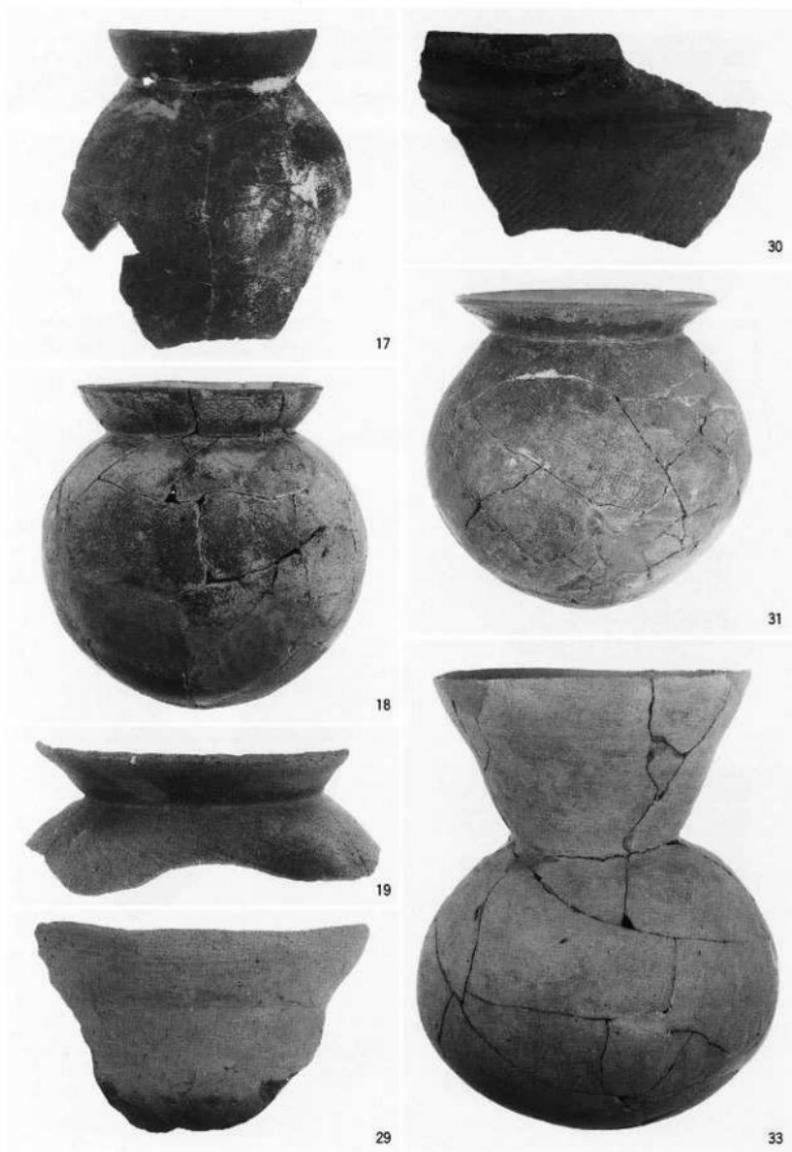
3調査区第4面土器（58）出土状況（東から）



7調査区第4面（東から）



陸群105・106 (1)、S K 201 (3・4)、N R 201 (12・13・15・16) 出土遺物



N R 201 (17~19)、S K 301 (29・30)、S D 303 (31)、S D 321 (33) 出土遺物



34



41



35



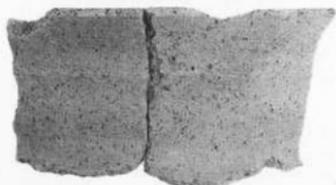
42



36



43



37

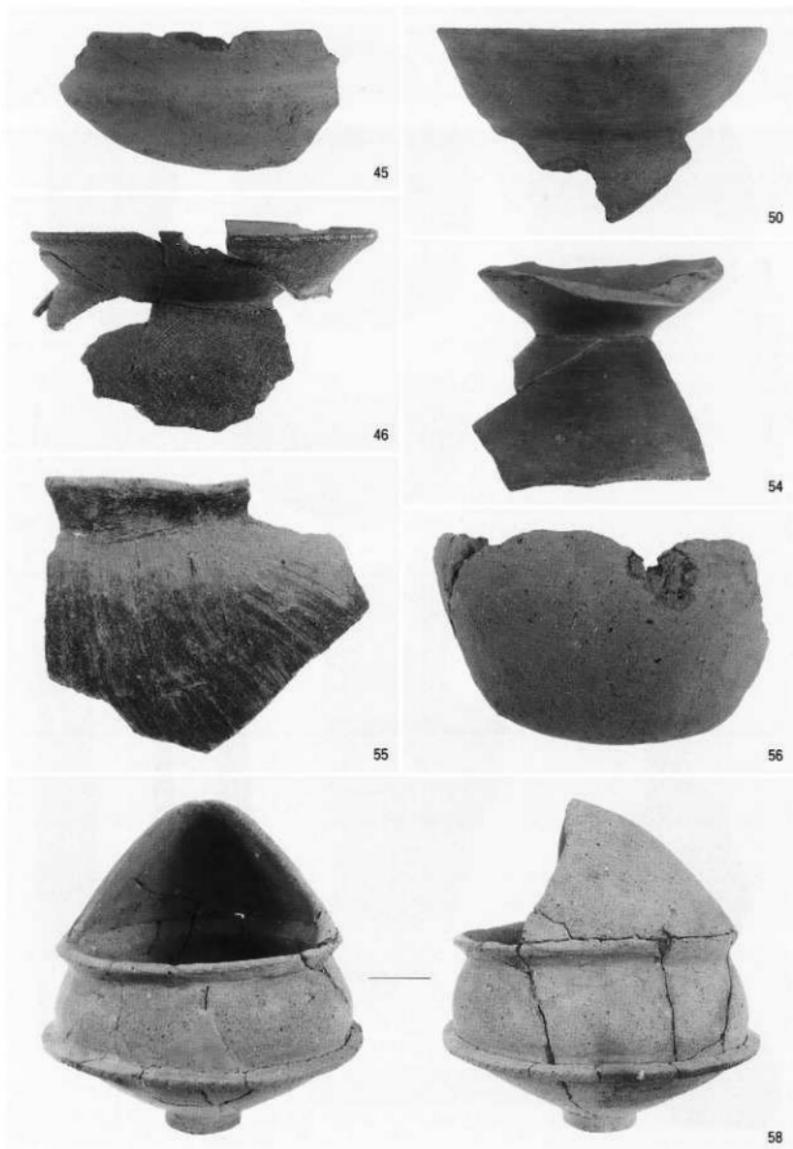


40

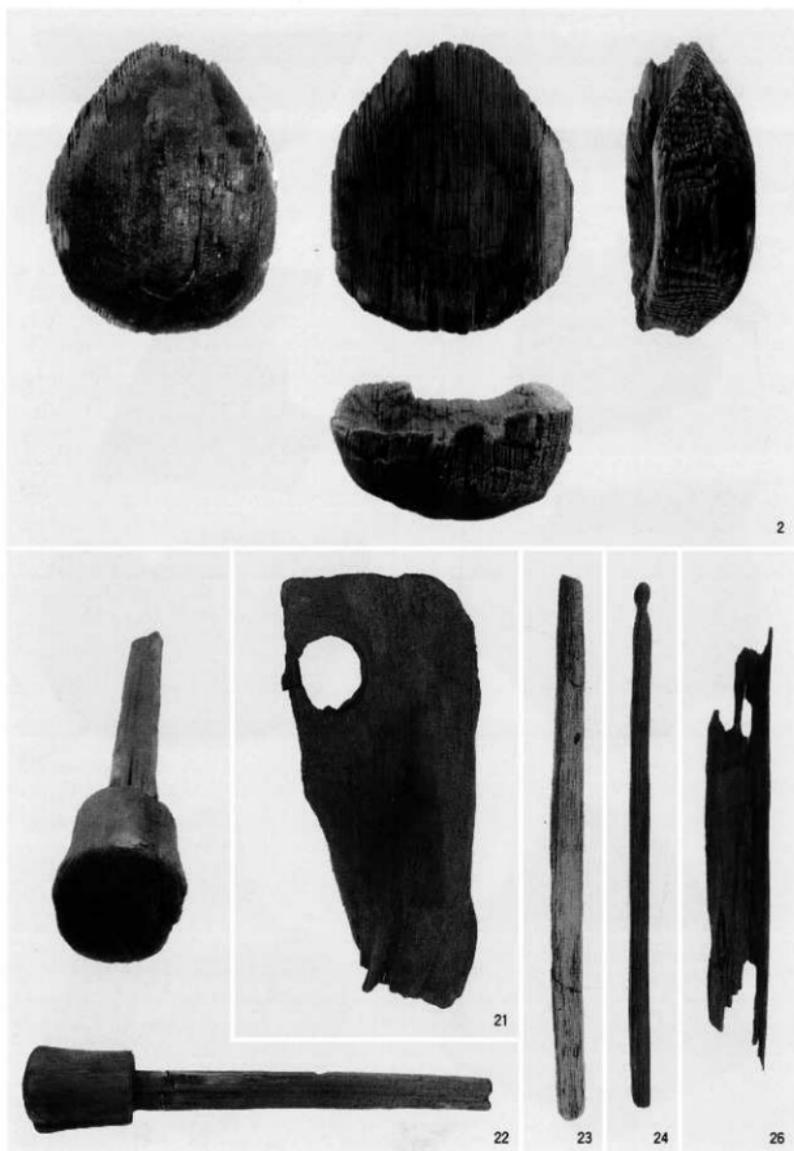


44

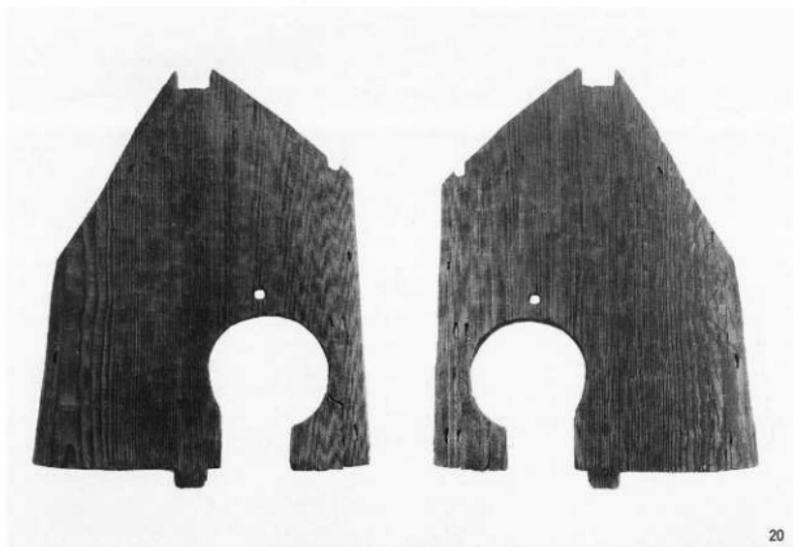
S D 338 (34~37・40)、8 調査区第V層 (41~43)、VI層 (44) 出土遺物



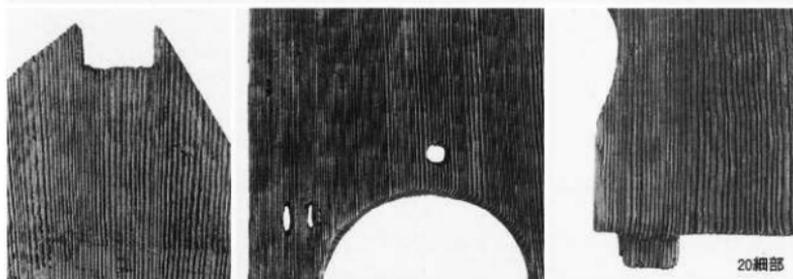
VI層 (45)、VII層 (46・50・54~56)、VIII層 (58) 出土遺物



水田115 (2)、N R 201 (21~24・26) 出土遺物



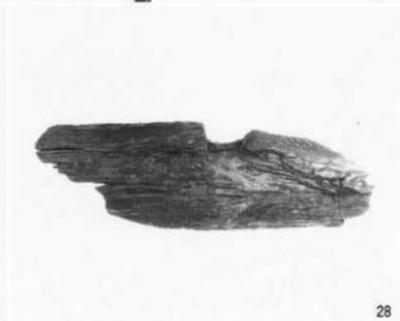
20



20細部



5



28

S K202 (5)、N R201 (20・28) 出土遺物

II 久宝寺遺跡第31次調査 (KH99-31)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市大字亀井他(平成16年2月23日実施の町名地番改正に伴い、現住所では北亀井町3丁目)で計画された大阪電業都市拠点地区内で、平成11年度に実施した区画道路3号線建設に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第31次調査(KH99-31)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第74号 平成9年7月31日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が都市基盤整備公団関西支社(現、独立行政法人都市再生機構西日本支社)から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成12年2月1日～3月30日にかけて西村公助が担当した。調査面積は76.8㎡である。現地調査においては、坂内洋平・後藤 喬・曹 龍・出島宣子・永井律子・中村百合・村田知子が参加した。
1. 整理業務は、平成16年7月～10月に実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測-伊藤静江・岩沢玲子・加藤邦枝・北原清子・竹田貴子・田島・永井・中村・村田・吉川一栄・若林久美子、図面トレース-山内千恵子、図面レイアウト-坪田真一、遺物写真-垣内が行った。
1. 本書の執筆・編集は、調査終了報告書および調査担当者との検討を基にして坪田が行った。
1. 現地調査の実施および整理業務においては、以下の方々からの協力を受けた。
独立行政法人都市再生機構西日本支社、大旺建設(株)
1. 基準点測量は下記の機関に委託した。
(株) ジェクト
1. 本書で記述した古墳時代初頭～前期の土器形式と時期概念は、古墳時代初頭前半・後半(庄内式-古相・新相)、古墳時代前期前半～後半(布留式-古相～新相)に区別した。当該期の土器編年は(財)八尾市文化財調査研究会報告37(原田1993)に従った。
1. 土器の形式・編年および検出遺構で参考とした文献については、101頁に提示した。

本文目次

第1章 調査に至る経過	89
第2章 調査概要	90
第1節 調査の方法と経過	90
第2節 基本層序	91
第3節 検出遺構と出土遺物	92
第3章 まとめ	101

插图目次

第1图	調査地位置図	90
第2图	調査区設定図	91
第3图	遺構平面図・北横断面図	93-94
第4图	S K 101・102平断面図	95
第5图	S K 101~103出土遺物実測図	95
第6图	S K 103平断面図	96
第7图	S K 104・105平断面図	97
第8图	S K 106・108出土遺物実測図	97
第9图	S K 106平断面図	98
第10图	S K 108平断面図	98
第11图	S K 109出土遺物実測図	98
第12图	S D 101・102断面図	99
第13图	S D 103出土遺物実測図	99
第14图	S P 101平断面図	99
第15图	N R 101出土遺物実測図	100
第16图	第IV層出土遺物実測図	101

写真目次

写真1	調査地より東方を望む	89
-----	------------	----

図版目次

図版一	1 調査区第1面 同上	図版四	2 調査区第2面 1 調査区調査状況
図版二	2 調査区第1面 2 調査区東壁	図版五	S K 101、S K 102、S K 103、S K 106、 S K 109出土遺物
図版三	1 調査区第2面 同上	図版六	S K 108、S K 109、S D 103、N R 101、 第IV層出土遺物

第1章 調査に至る経過

久宝寺遺跡における発掘調査は、遺跡の西部を縦断する近畿自動車道建設に伴う調査を嚆矢とし、大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会・(財)東大阪市文化財協会による発掘調査が随所で継続して実施されている。これらの調査では縄文時代後期～近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが認識されている。

今回、久宝寺遺跡第31次調査を実施した久宝寺遺跡南西部においては、北亀井町3丁目で実施した第1次調査(KH84-1)、第9次調査(KH91-9)で、古墳時代初頭(庄内式期)～前期(布留式期)の居住域や墓域が検出されている。第9次調査では、古墳時代前期前半(布留式古相)の2棟の住居内から重圓文鏡と素文鏡が出土したほか、墳丘長35mを測る前方後方墳1基が検出されており、中河内地域における古墳文化受容期の在り方を知る上で貴重な資料を提供した。西接する近畿自動車道に伴う亀井北(その1～3)発掘調査では、弥生時代前期～奈良時代に比定される遺構・遺物が検出されており、遺跡名を異にするものの本来は一連の遺跡であったと考えられる。平成9年度以降は旧国鉄竜華操車場跡地の再開発に伴う調査が実施されており、西部では当研究会による第22次調査(KH97-22)・第25次調査(KH98-25)・第27次調査(KH99-27)・第36次調査(KH2000-36)・第37次調査(KH2001-37)、(財)大阪府文化財センターによる竜華東西線の調査がある。調査では弥生時代前期～近世に比定される遺構・遺物が検出されている。第37次調査では古墳時代前期前半(布留式古相)の古墳・土器棺墓が検出され、第9次調査で検出した墓域の広がり確認された。また竜華東西線の調査では、これまで周辺では稀薄であった奈良・鎌倉時代の遺構が検出され、櫃を井戸枠に転用した井戸は特筆される。これらの発掘調査の結果から遺跡範囲南西部では、弥生時代前期～近世に至る遺構・遺物が重層的に検出され、沖積低地に特有の河川堆積物の累重により形成された不安定な微地形を積極的に活用した、各時期の集落の広がりが確認されている。なお地理・歴史的環境については「本書Ⅰ-第2章」を参照されたい。

本書で報告する久宝寺遺跡第31次調査(KH99-31)は、平成11年度に区画道路3号線建設に伴って実施した発掘調査で、総調査面積は76.8㎡を測る。発掘調査は八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき実施した。調査は「大阪竜華都市拠点地区における埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」に基づいて、都市基盤整備公団関西支社、(財)八尾市文化財調査研究会とによる業務委託契約書の締結後、現地調査に着手した。



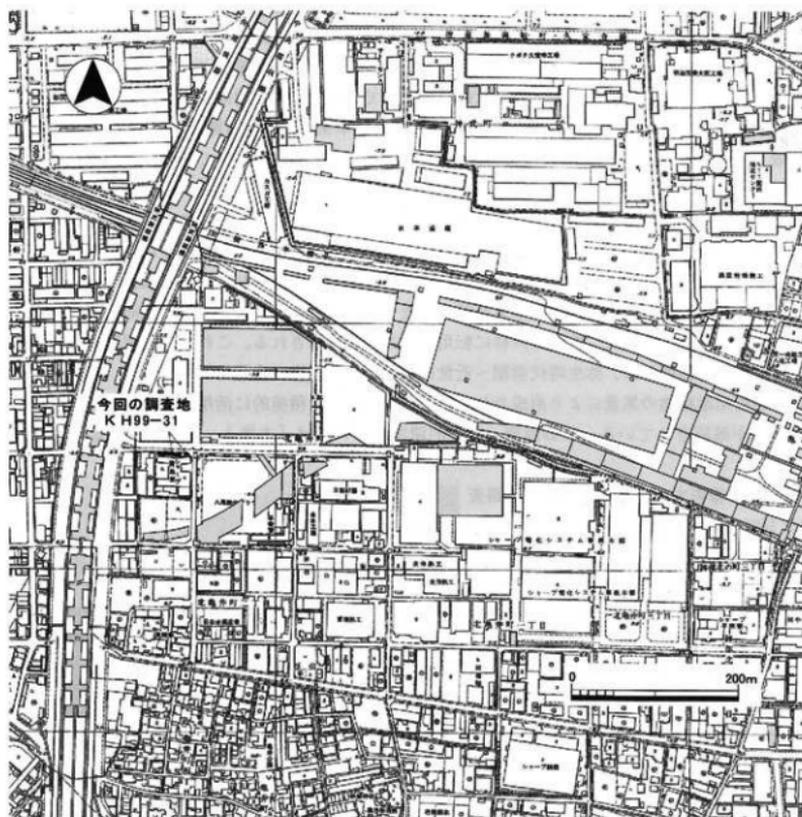
写真1 調査地より東方を望む

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、旧国鉄電車操車場跡地とその周辺で計画された「八尾都市計画事業大阪電車都市拠点土地区画整理事業」の区画道路3号線建設に伴うもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第31次調査にあたる。

調査地点は電車操車場跡地の南西側に位置している。調査地は東西に並ぶ2箇所で、西側を1調査区(東西28.0m・南北2.4m)、東側を2調査区(東西4.0m、南北2.4m)とした。総調査面積は76.8㎡を測る。調査は1、2調査区の順に行った。



第1図 調査地位置図

調査区全域の地区割については、竜華操車場跡地周辺を含む東西2km、南北1kmにわたって、国土座標第VI系〔日本測地系〕(原点-東経136°00′、北緯36°00′・福井県越前岬付近)を基準として設定した大区画・中区画・小区画を使用した。この地区割基準は、竜華操車場跡地内において平成9年度以降に継続する発掘調査に対応する為に、本調査研究会が独自に設定したものである。大区画は500m四方で全体を8区(I~Ⅷ)に区分し、北西隅の区画をIとし南東隅をⅧと呼称した。中区画は大区画を100m単位に25区(1~25)に区分し、北西隅の区画を1とし南東隅を25と呼称した。小区画は中区画を10m単位に区画し、地区の呼称については、東西方向はアルファベット(西からA~J)、南北方向は算用数字(北から1~10)で示し、1A地区~10J地区とした。なお個々の地点表記においては国土座標値を入れる方法を取った。(本書14頁参照)

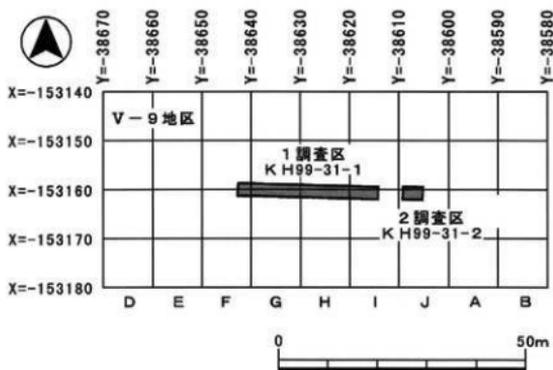
調査は鋼矢板打設により調査区を圍繞する方法をとり、調査区の北・西・東に土層観察用のセクション(幅0.5m)を設定している。

掘削は、八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表下約1.65m前後までを機械で行なったのち、約0.95mの範囲を人力により調査を進め、遺構の検出に努めた。

調査面の呼称については、人力による調査で検出された面を上部より「第1面」とした。

遺構名は、遺構略号の後に面番号を付与し、2桁の番号と合わせて表記した。[凡例SD101]。番号については遺構・面毎に1調査区から順番に通し番号を付けた。

調査の結果、弥生時代後期と古墳時代初頭(庄内式期)~前期(布留式期)に比定される遺構・遺物を検出した。遺物は遺構内および包含層から出土しており、コンテナ(40×60×20cm)3箱が出土している。



第2図 調査区設定図(S=1/1000)

第2節 基本層序

調査地全体を通して北壁で認められた地層を、層相から12層(第0~9層)に分層し、基本層序とした。

第0層:5G6/1緑灰色中礫混粘土。客土層で、当地に近年まで建っていた社員寮建設時の盛土と思われる。層厚1.3~1.6m。現地表面はT.P.+7.8~7.9mを測る。

- 第1-1層：10YR5/8黄褐色細礫混粘土。1調査区で見られた。層厚0.1~0.38m。
- 第1-2層：2Y4/1黄灰色シルト混粘土。1調査区西部で見られたが、遺構の可能性がある。最大層厚0.38m。
- 第2層：2.5Y5/2暗灰黄色粗粒砂混粘質シルト。1調査区で見られた。層厚0.1~0.3m。ほぼ当層までが機械掘削の対象である。
- 第3層：10YR6/6明黄褐色細粒砂混粘質シルト。調査地全体で見られた水成層である。2区では層厚が増しており、ラミナが顕著に認められる。層厚0.1~0.5m。
- 第4-1層：5B4/1暗青灰色粘質シルト。調査地全体で見られた。層厚0.1~0.3m。土師器の破片が少量出土している。
- 第4-2層：10BG4/1暗青灰色粗粒砂。1調査区西部で見られた。層厚0.1~0.2m。
- 第4層は一連の水成層と捉えられ、第4-2層の粗粒砂層は一時的な洪水砂の堆積であろう。
- 第5層：10BG6/1青灰色シルト。1調査区で見られた。層厚0.5~0.7m。
- 第6層：5PB2/1青黒色細粒砂混粘土。2調査区で見られた。上部に植物遺体を含み、土壌化している。層厚0.1m。
- 第5・6層上面の標高はT.P.+5.9~6.0m前後を測り、上面が第1面で、古墳時代初頭(庄内式期)から前期(布留式期)の遺構を検出した。また第6層下面が第1-2面である。
- 第7層：5B4/1暗青灰色シルト混粘土。層厚0.1~0.2m。上面はT.P.+5.4~5.5m前後を測る。上面が第2面。弥生時代後期の遺構を検出した。
- 第8層：10BG4/1暗青灰色シルト。層厚0.1~0.2m。
- 第9層：10BG3/1暗青灰色粘土。層厚0.1m以上。

第3節 検出遺構と出土遺物

第1-1面

調査の結果、現地表下約1.8mの第5層上面(T.P.+5.9~6.0m前後)で、古墳時代初頭の土坑9基(S K 101~S K 109)・溝3条(S D 101~S D 103)・小穴1個(S P 101)を検出した。

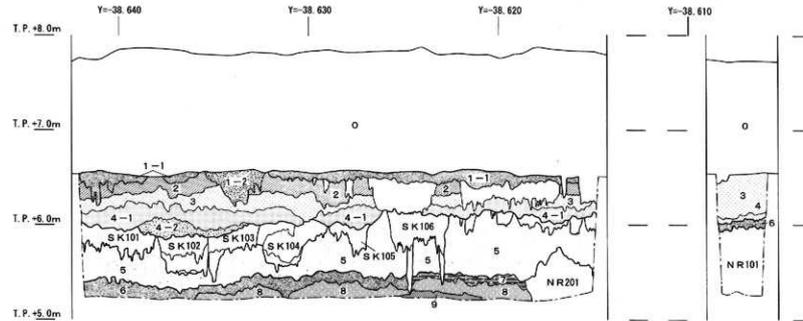
土坑(S K)

S K 101

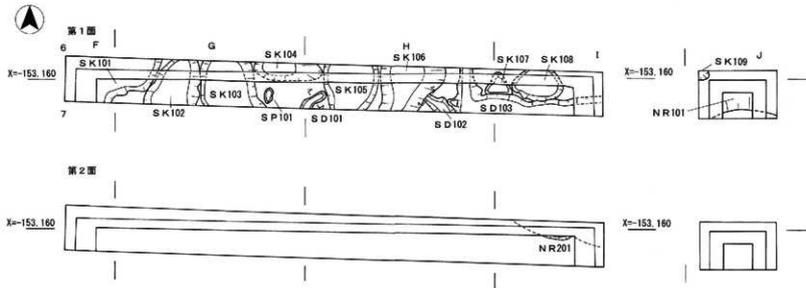
1調査区西端のV-9-6・7F・G地区で検出した。遺構の南・北・西は調査区外に至るため本来の形状は不明である。検出部分の平面形状は不定形で、東西4.7m以上・深さ0.46m以上を測る。断面は皿状を呈するが、底部は起伏が著しい。埋土は10BG3/1暗青灰色粗粒砂混粘土の単一層である。遺物は庄内式古相の土器(壺・甕・高杯)が出土しており、甕(1~3)を図化した。1は外面にやや太めの平行タタキを施す庄内甕で、残存部下位にはハケが見られる。色調は灰黄褐色を呈し、焼成良好で硬質である。2は口縁部内面にヨコハケを施す。色調は黒色で1と同様に硬質である。3は外面明赤褐色を呈し、焼成は不良である。角閃石を含まない胎土で、搬入品であろう。

S K 102

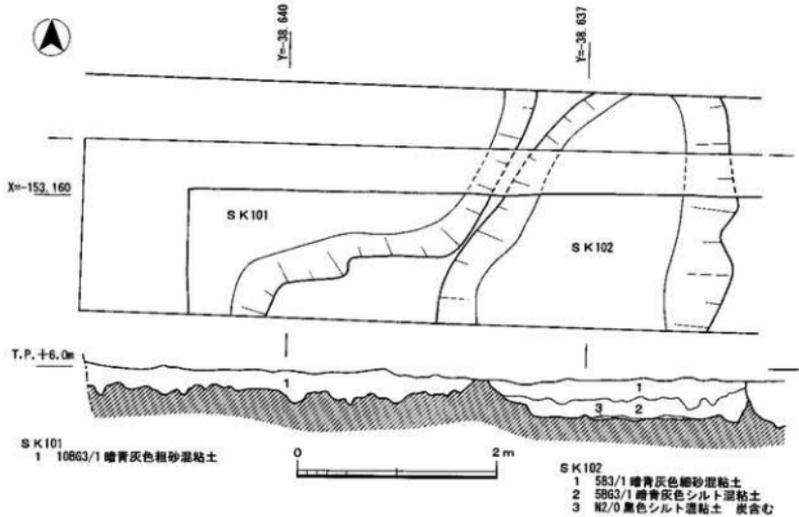
V-9-6・7G地区で、S K 101の東側に近接して検出した土坑である。遺構の南・北は調査区外に至るため本来の形状は不明である。検出部分の平面形状は不定形で、東西2.8m、南北1.9



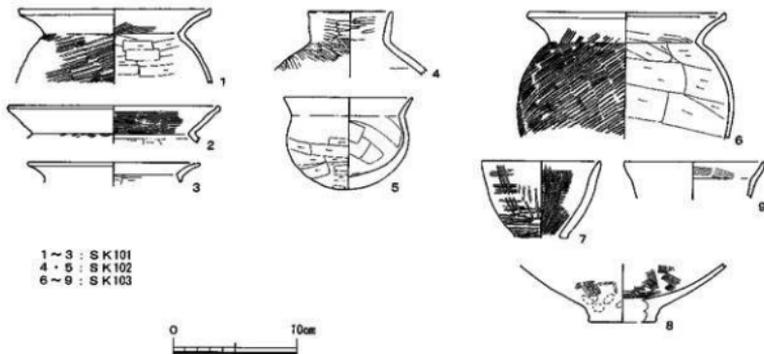
- 第0層 506/1暗灰色中硬凝粘土 (壁土)
- 第1-1層 10YR5/3黄褐色細砂凝粘土
- 第1-2層 2Y4/1黄灰色シルト凝粘土
- 第2層 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂凝粘土
- 第3層 10YR5/6明黄褐色細粒砂凝粘土
- 第4-1層 5B4/1暗青灰色粘質シルト ラミナ
- 第4-2層 10B6/4暗青灰色粘粒砂
- 第5層 10B6/1暗青灰色シルト
- 第6層 5P2/1黄褐色細粒砂凝粘土
- 第7層 5B4/1暗青灰色シルト凝粘土
- 第8層 10B6/4/1暗青灰色シルト
- 第9層 10B3/1暗青灰色粘土



第3図 遺構平面図・北壁断面図



第4図 S K 101・102断面図

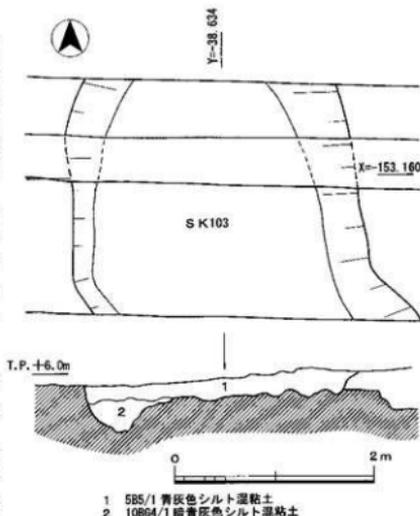


第5図 S K 101~103出土遺物実測図

m以上を測る。断面形状は逆台形で、深さ約0.4mを測る。埋土は上から5B3/1暗青灰色細砂混粘土、5B63/1暗青灰色シルト混粘土、N2/0黒色シルト混粘土(炭含む)の3層から成る。本遺構はS K 103に切られる。遺物は庄内式古相の土器(壺・甕・高杯)が出土しており、4・5を図化した。4はヘラミガキを多用する精製の小形直口壺である。外面が煤けている。復元口径6.8cmを測る。5は口径が体部径をわずかに上回る小形丸底壺で、復元口径10.4cm・体部最大径9.9cmを測る。外面にはクラック(縦方向の皸)が顕著に見られる他、黒斑を有する。

S K 103

S K 102の東側、V-9-6・7 G 地区で検出した。遺構の南・北は調査区外に至るため本来の形状は不明である。検出部分の平面形状は不定形で、東西2.95m・南北1.9m以上を測る。断面形状はほぼ逆台形を呈し、深さ約0.25mを測るが、底部の西側が深くなり深さ約0.5mを測る。埋土は上層が5B5/1青灰色シルト混粘土、下層が10BG4/1暗青灰色シルト混粘土である。本遺構はS K 102・104を切っている。遺物は庄内式古柢の土器(壺・甕・鉢・高杯)が出土しており、6～9を図化した。6は短い単位の平行タタキを密に施す庄内甕で、復元口径16.0cmを測る。焼成良好で非常に硬質である。7は口縁部にヘラミガキを多用する精製の直口甕で、外面がやや煤けている。8は底部の小片で、体部が張るタイプの壺と考えられる。外面は平行タタキをナデ消した後、ヘラミガキを施す。9は小形の鉢の小片である。



1 5B5/1 青灰色シルト混粘土
2 10BG4/1 暗青灰色シルト混粘土

第6図 S K 103断面図

小片で、体部が張るタイプの壺と考えられる。外面は平行タタキをナデ消した後、ヘラミガキを施す。9は小形の鉢の小片である。

S K 104

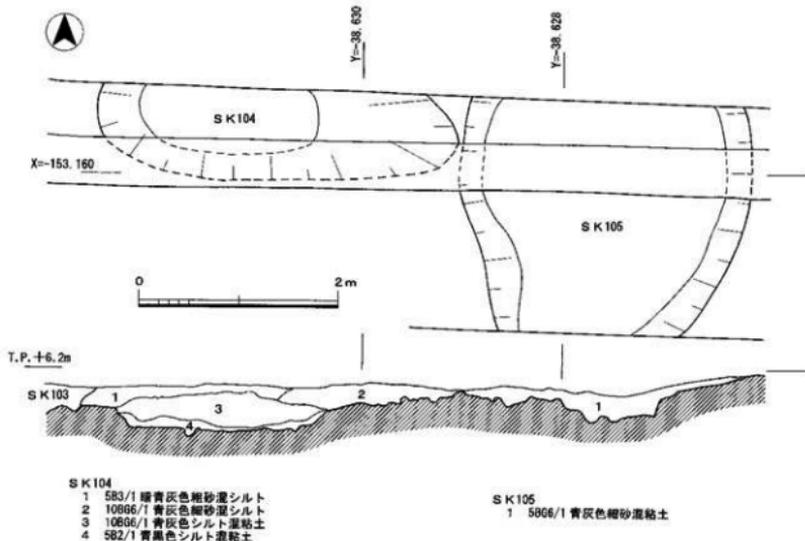
S P 101の北側、V-9-6・7 G・H 地区のセクション内で検出した土坑である。遺構の北は調査区外に至るため本来の形状は不明で、南は北側溝内に収まるものである。検出部分の平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径3.6m・短径0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.5mを測る。埋土は上から5B3/1暗青灰色粗砂混シルト、10BG6/1青灰色細砂混シルト、10BG6/1青灰色シルト混粘土、5B2/1青黒色シルト混粘土の4層から成る。遺物は土師器片が少量出土しているが、図化したものはない。

S K 105

V-9-6・7 H 地区で検出した土坑である。遺構の南・北は調査区外に至るため本来の形状は不明である。検出部分の平面形状は不定形で、東西3.0m・南北2.4m以上を測る。断面形状は逆台形で、深さ約0.3mを測る。埋土は5BG6/1青灰色細砂混粘土の単一層である。遺物は土師器片が少量出土しているが、図化したものはない。

S K 106

S K 105東側、V-9-6・7 H 地区で検出した。遺構の南・北は調査区外に至るため本来の形状は不明である。検出部分の平面形状は不定形で、東西3.3m・南北2.4m以上を測る。断面形状は逆台形を呈し、深さ約0.4mを測るが、底部には数箇所窪む部分が認められる。埋土は10BG6/1青灰色シルト混粘土、5BG6/1青灰色粘土、10BG2/1青黒色粘土の3層から成る。本遺構はS D 102を切る。遺物は土師器(甕・高杯・器台)が出土しており、10～13を図化した。10・11は庄内式甕

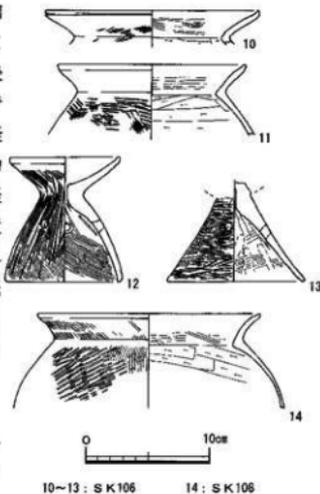


第7図 SK104・105平面図

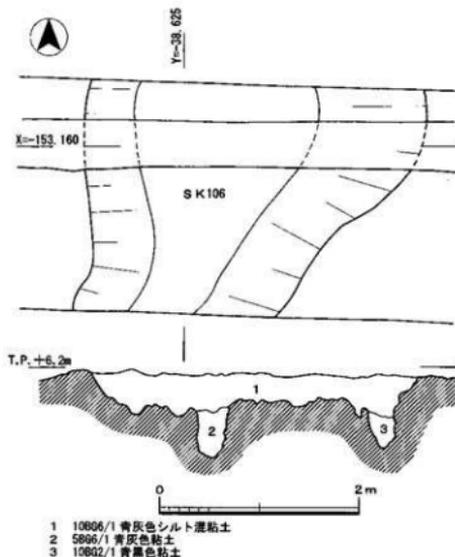
口縁部の小片で復元口径は17.2cm・15.2cmを測る。10は口縁部叩き出し技法によると考えられ、口縁部外面の中位まで平行タキが認められる。11の外面調整は平行タキ後粗いハケと思われるが不明確である。12・13は小形器台である。12はほぼ完形で、口径8.9cm・器高10.3cm・底径9.4cmを測る。受部と脚部が貫通するタイプで、孔径は約3mmを測る。内彎気味の脚部には外からの刺突による直径6mmの四方孔を施すが、その内の1孔の下位には穿孔位置を変更したため残ったと思われる竹管文状の痕跡が見られる。外面の片側に黒斑を有する。13は脚部ほぼ完形で、底径10.7cm・脚高7.1cmを測る。外からの刺突による直径7mmの四方孔を有する。これらの土器の時期は庄内式新相と考えられる。

SK107

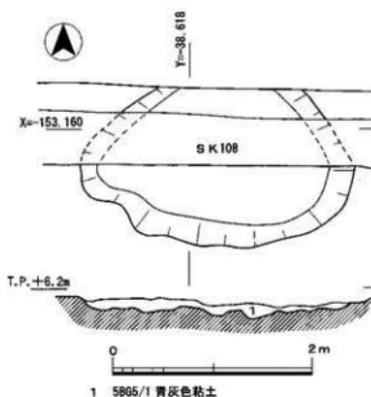
V-9-6・7H・I地区で検出した土坑で、SD103を隔ててSK106の東側にあたる。平面形状は三角形を成し、一辺約1.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ約0.1mを測る。埋土は5B4/1暗青灰色細砂混粘土の単一層である。遺物は土師器片が少量出土しているが、図化したものはない。



10-13: SK106 14: SK106
第8図 SK106・108出土遺物実測図



第9図 SK106平断面図



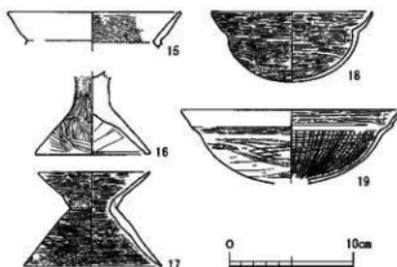
第10図 SK108平断面図

SK108

V-9-6・7I地区、SK107東側に近接して検出した。遺構の北は調査区外に至るため本来の形状は不明である。検出部分の平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径2.7m・短径1.7m以上を測る。断面形状は逆台形を呈し、深さ約0.15mを測る。埋土は5BG5/1青灰色粘土の単一層である。遺物は土師器片が少量出土しており、庄内式甕(14)を図化した。復元口径18.0cmを測り、外面は平行タタキ後肩部にタテハケを施す。本遺構はSD103を切る。

SK109

2調査区の北西部、V-9-6・7J地区で検出した。遺構の北・西は調査区外に至るため本来の形状は不明である。検出部分の平面形状からは円形になると思われ、直径約0.55mを測る。緩やかな傾斜をもって北西に落ち、深さ0.2m以上を測る。埋土は10BG2/1青黒色シルト混粘土の単一層である。遺物は土師器が出土しており、15-19を図化した。甕(15)は口縁部の小片で、内面にヨコハケを施す。脚部(16)は器種不明である。上面は未調整で剥離面と思われる。



第11図 SK109出土遺物実測図

外面は全体にヘラミガキを施す。17は鼓形器台で、口縁部の2/3が欠損している。復元口径9.1cm・器高7.8cm・底径11.2cmを測る。内外面の全体に横方向のヘラミガキを施す。18・19は小形有段鉢である。18は約3/5が残存し、口径13.0cm・器高5.9cmを測る。調整は全体に横方向のヘラミガキで、肩部タテハケ、底部ヘラケズリが残る。19は約1/2の残存で、口径17.8cm・器高約6.2cmを測る。調整は底体部外面ヘラケズリ後、全体を横方向にヘラミガキし、内面に放射状ヘラミガキを加える。17~19は焼成良好な精製品である。これらの土器の時期は布留式古相に位置付けられる。

溝 (SD)

SD101

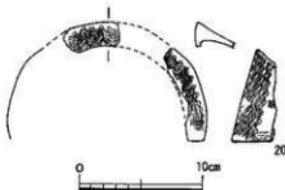
SK105の西側のV-9-7G・H地区で検出した。南西-北東方向に伸びる。北側はやや東に折れ曲がり終息している。検出長1.4mで、幅0.4~0.6mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.15mを測る。埋土は上層が5B4/1暗青灰色シルト混粘土、下層が10B4/1暗青灰色粘土である。遺物は土師器の破片が少量出土しているが、図化したものはない。

SD102

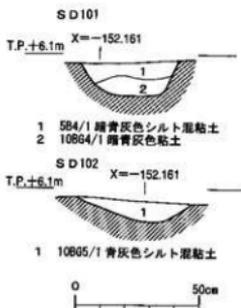
SD103の西側のV-9-7H地区で検出した。南東-北西に伸びる。検出長1.7mで、幅0.45~0.8mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10B5/1青灰色シルト混粘土の単一層である。遺物は土師器の破片が少量出土しているが、図化したものはない。本遺構はSK106に切られ、SD103を切る。

SD103

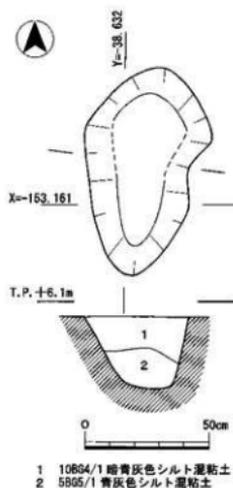
1区の東部のV-9-6・7HI地区で検出した。平面形状は東西方向に伸び、西側は幅を狭め、北に屈曲する。検出長7.6mを測る。溝の南側は調査区外にあるため平面および断面の形状は不明である。屈曲部より北側は幅1.0mを測り、断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は5B2/1青黒色シルト混粘土の単一層である。本遺構はSK108・SD102に切られる。遺物は土師器の破片が少量出土しており、20を図化した。20は手焙形土器の覆部で、覆部高約9.8cmに復元できる。覆部外面前方及び端面に縁辺に沿って、また下端に横方向に櫛描波状文を施すもので布留式期に比定されよう。



第13図 SD103出土遺物実測図



第12図 SD101・102断面図



第14図 SP101平断面図

小穴 (S P)

S P 101

S K 103の東側のV-9-7 G地区で検出した。平面形状は南北方向に長い楕円形に近く、長さ0.8m、短径0.4mを測る。断面形状は逆台形を呈し、深さ約0.3mを測る。埋土は上層が10BG4/1暗青灰色シルト混粘土、下層が5BG5/1青灰色シルト混粘土である。遺物は庄内甕口縁部の小片が1点出土したのみである。

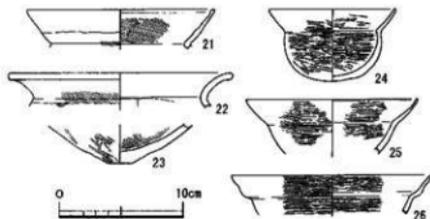
第1-2面

2調査区第1-1面を構成する第6層下面で、調査区全域を占める河川1条(N R 101)を検出した。

河川 (N R)

N R 101

2調査区の全域を占める河川である。南東部の第25次調査(K H 98-25)で検出された大規模なN R 201から分流する流路と考えられる。肩は調査区外に至り検出していないが、底部から南肩への立ち上がりが見られた。検出状況では東西方向を示しているが、1調査区には及んでいないことから、西側では北に方向を変えたと考えられる。規模は検出長1.6m・幅1.6m以上・深さ0.7



第15図 N R 101出土遺物実測図

m以上を測る。河川埋土は5Y6/1灰色礫混粗粒砂である。埋土からは弥生時代後期～布留式古相に比定される土器が少量出土しており、21～26を図化した。21は布留式甕、22はV様式系甕の口縁部小片である。21は口縁部内面にハケを施す。22は生駒西麓産の胎土である。23は壺と思われる、小さな平底を有するもので、底部外面はヘラケズリである。24は小形丸底壺で、底体部がほぼ残存し、復元口径10.2cm・器高6.0cm・体部最大径7.8cmを測る。ヘラミガキを多用し、体部外面に黒斑を有する。25・26は小形鉢の小片で、26は口縁部が二段屈曲する。共に調整はヘラミガキである。

第2面

第7層上面(T.P. +5.4~5.5m前後)で河川1条(N R 201)を検出した。

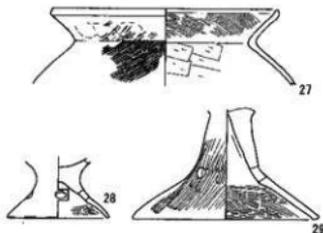
河川 (N R)

N R 201

1調査区東部のV-9-6・7 I地区で検出した河川で、南東-北西に蛇行して伸びると思われる。平面的には南肩の一部を検出したのみで、北・東側は調査区外に至るため遺構の全容は不明である。検出長約4.0m・深さ0.6m以上を測る。埋土は5Y6/1灰色礫混粗粒砂である。遺物は出土しておらず時期等は明らかではないが、第1面遺構の時期から古墳時代初頭以前の河川である。

第4層出土遺物

庄内壺(27)は口縁部が約1/3残存し、復元口径18.4cmを測る。外面の平行タタキは8本/cmと非常に細かく、庄内式期新相に比定される。28は四方孔を有する脚台部で、底径8.2cmを測る。小形の鉢・壺等の脚台部と思われる。29は高杯脚部で、脚端部の1/3が欠損する。底径15.0cmを測り、調整は外面ヘラミガキ、内面ハケで、三方孔を有する。弥生時代後期末～庄内式期に比定される。



第16図 第IV層出土遺物実測図

第3章 まとめ

第1-1・2面では、古墳時代初頭前半(庄内式古相)～前期前半(布留式古相)の遺構が密に検出された。狭長な調査地であり検出した土坑や溝はほとんどが調査区外に至るため、遺構の形状や性格など不明点が多く、全容は明らかになっていない。しかし、遺構内から出土する遺物の時期は、庄内式古相～布留式古相のもので、当地が長期にわたって居住域となっていたことが分かる。北東の第9次調査(KH91-9)や、遺跡の名称は異なるが、西接する亀井北(その2)調査地でも当該期の居住域や墓域が検出されており、一連の集落域であろう。

第2面では古墳時代初頭以前の自然河川NR201を検出した。この河川が埋没した後に、自然堤防状に変化し、洪水などの被害を受けにくい安定した土地になり、古墳時代初頭～前期頃の生活の場となったことが看取される。

註記

註1 成海佳子 1992 「13 久宝寺遺跡第9次調査(KH91-9)」『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

註2 奥和之・山上弘 1986 『亀井北(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

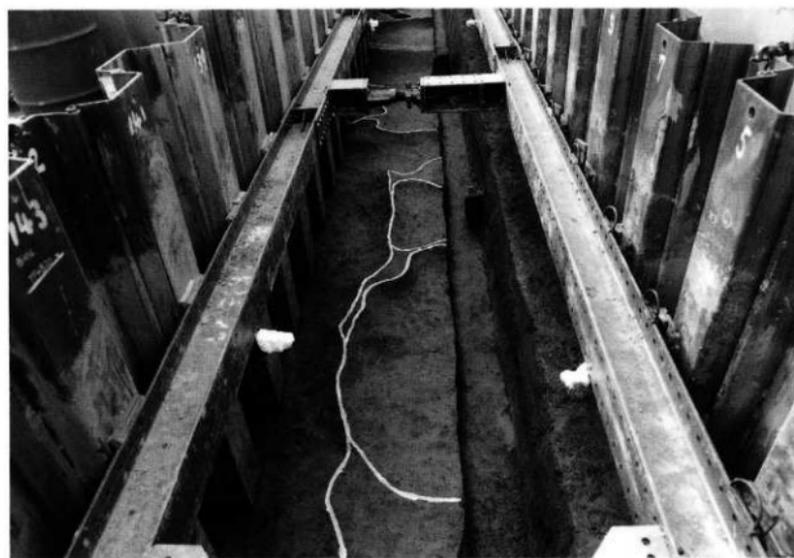
参考文献

- ・西村公助 2000 「10. 久宝寺遺跡第27次調査(KH99-27)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 2001 『久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書—大阪電華都市拠点地区区画道路2号線に伴う—』(財)八尾市文化財調査研究会報告68』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則・金親満夫 2004 「Ⅲ久宝寺遺跡(第37次調査)」『久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告77』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村歩・奥村茂輝 2004 「久宝寺遺跡・電華地区発掘調査報告書Ⅵ—大阪電華都市拠点地区電華東線建設に伴う発掘調査—」『(財)大阪府文化財センター調査報告書第118集』(財)大阪府文化財センター

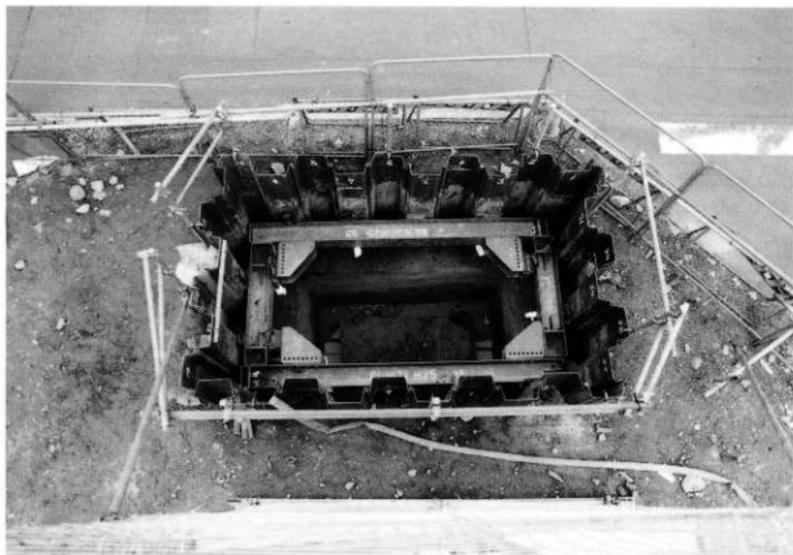
圖 版



1調査区第1面（西から）



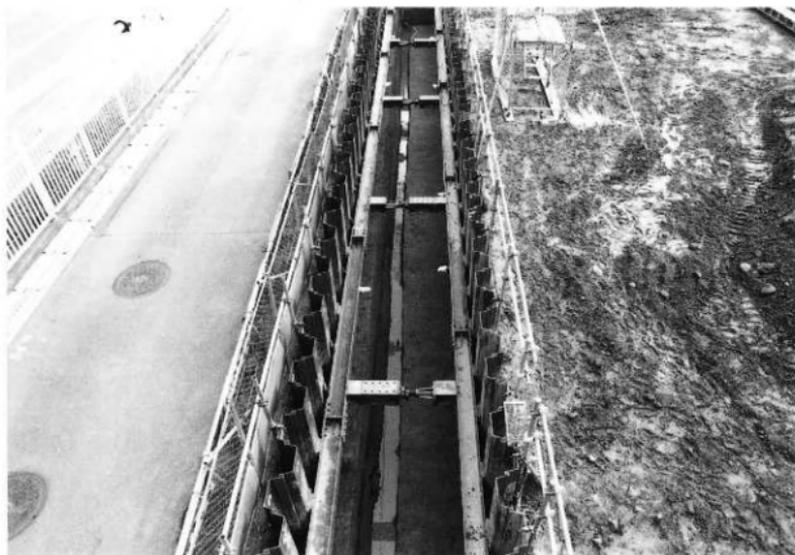
同上（東から）



2調査区第1面（南から）



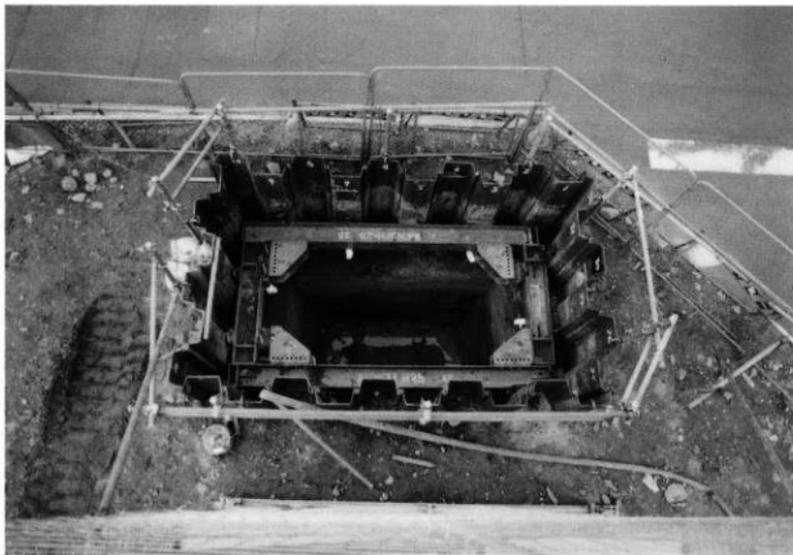
2調査区東壁（西から）



1調査区第2面（西から）



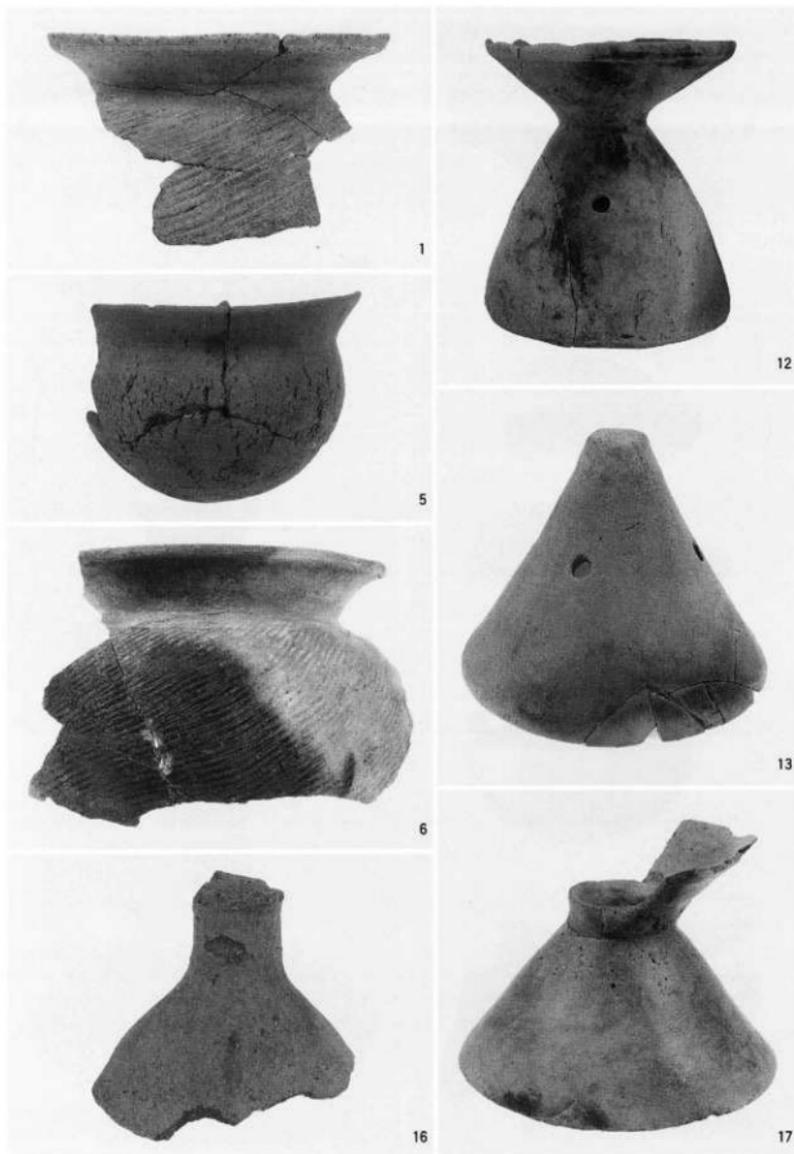
同上（東から）



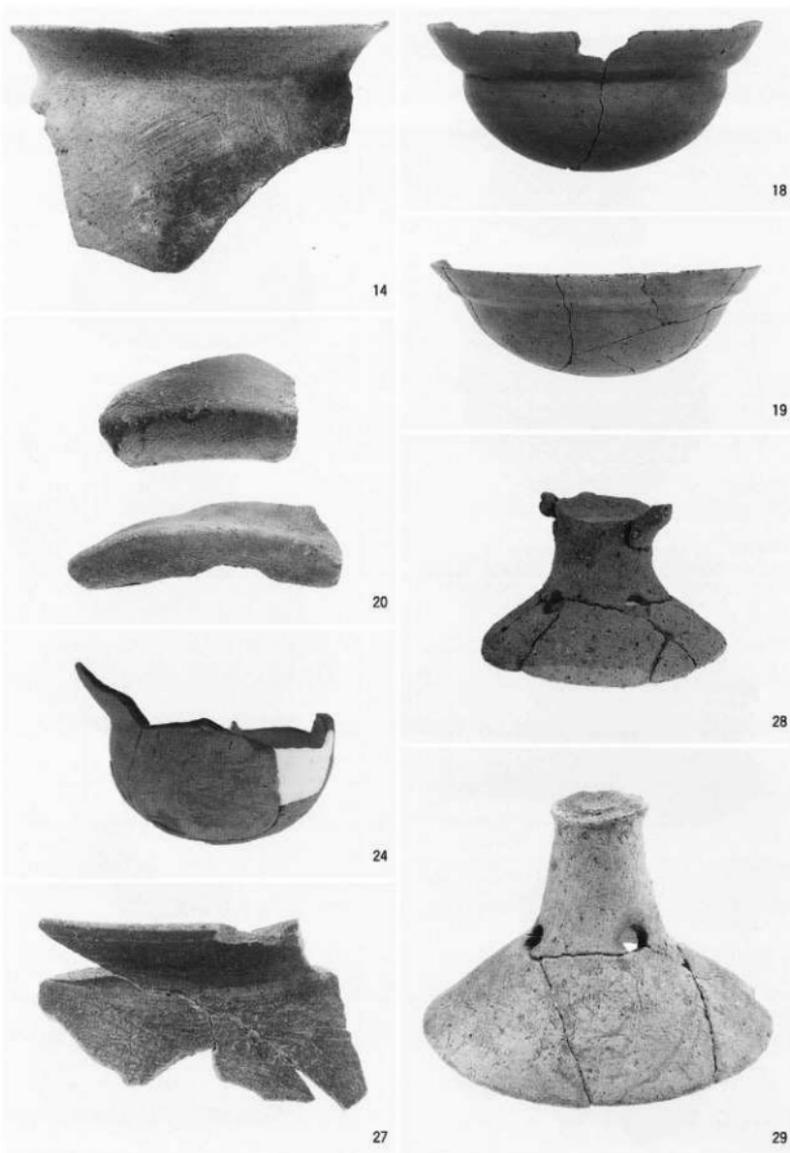
2 調査区第2面（南から）



1 調査区調査状況（西から）



S K 101 (1)、S K 102 (5)、S K 103 (6)、S K 106 (12·13)、S K 109 (16·17) 出土遺物



S K 108 (14)、S K 109 (18・19)、S D 103 (20)、N R 101 (24)、第IV層 (27~29) 出土遺物

Ⅲ 久宝寺遺跡第46次調査 (K H2002-46)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市大字亀井他(平成16年2月23日実施の町名地番改正に伴い、現住所では北亀井町3丁目)で計画された大阪竜華都市拠点地区内で、平成14年度に実施した竜華東西線1-1工区(南)建設に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第46次調査(KH2002-46)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第74号 平成9年7月31日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が都市基盤整備公団関西支社(現、独立行政法人都市再生機構西日本支社)から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成15年1月28日～3月10日にかけて二宮(旧姓金親)満夫(現、宮崎県教育委員会)が担当した。調査面積は72.0㎡である。現地調査においては、伊藤静江・岩沢玲子・垣内洋平・加藤邦枝・川村一吉・竹田貴子・田島宣子・永井律子・中村百合・村田知子・吉川一栄・若林久美子が参加した。
1. 整理業務は、平成17年11月～平成18年3月に実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測-北原清子・村井俊子・山内千恵子、図面トレース-山内、図面レイアウト-坪田真一、遺物写真撮影-垣内が行った。
1. 本書の執筆・編集は、調査終了報告書を基にして坪田が行った。
1. 現地調査の実施および整理業務においては、以下の方々からの協力を受けた。
独立行政法人都市再生機構西日本支社、柴環境(株)、安西工業(株)
1. 航空写真測量は下記の機関に委託した。
(株)かんこう
1. 土器の形式・編年および検出遺構で参考とした文献については、116頁に提示した。

本文目次

第1章 調査に至る経過	103
第2章 調査概要	104
第1節 調査の方法と経過	104
第2節 基本層序	105
第3節 検出遺構と出土遺物	107
第3章 まとめ	116

插图目次

第1图	調査地位位置図	103
第2图	調査区設定図	104
第3图	基本層序	106
第4图	第1面平面図・遺構断面図	108
第5图	SE101平断面図	109
第6图	SE101出土遺物	109
第7图	SK101・102、SD101出土遺物	110
第8图	SD106出土遺物	112
第9图	第2・3面平面図	113
第10图	畦畔状遺構301断面図	114
第11图	第3面木製品出土状況	114
第12图	第4層出土遺物	115

表目次

第1表	SD101~105一覽表	110
-----	--------------	-----

図版目次

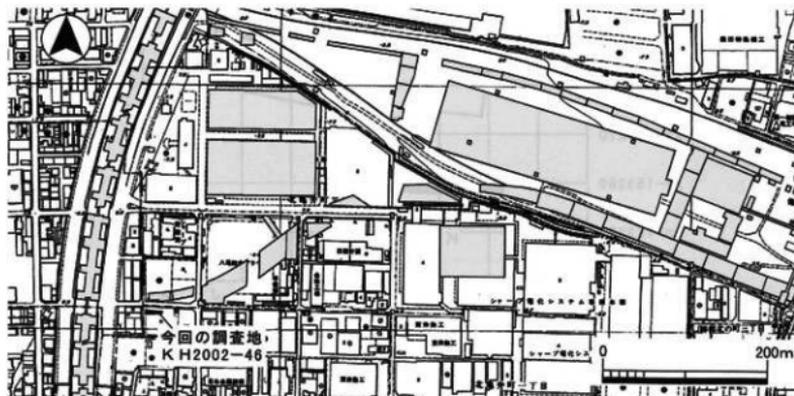
図版一	第1面 第1面東部	図版五	畦畔状遺構301 第3面木製品出土状況
図版二	SE101 SE101完掘	図版六	SE101、SK101、SD106出土遺物
図版三	第2面 第2面東部	図版七	SD106出土遺物
図版四	第3面 同上	図版八	第4層、第3面出土遺物

第1章 調査に至る経過

久宝寺遺跡における発掘調査は、遺跡の西部を縦断する近畿自動車道建設に伴う調査を嚆矢とし、大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会・(財)東大阪市文化財協会による発掘調査が随所で継続して実施されている。これらの調査では縄文時代後期～近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが認識されている。

今回、久宝寺遺跡第46次調査を実施した久宝寺遺跡南西部においては、第1次調査(KH84-1)、第9次調査(KH91-9)で古墳時代初頭(庄内式期)～前期(布留式期)の居住域や墓域が検出されている。また平成9年度以降は旧国鉄電華操車場跡地の再開発に伴う調査が実施されており、第22次調査(KH97-22)では、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される遺構・遺物が検出されている。調査地東側では第25次調査(KH98-25)、第36次調査(KH2000-36)、第37次調査(KH01-37)を実施しており、第1・9次調査の居住域や墓域の広がりを確認した他、古墳時代初頭(庄内式期)・古墳時代中期の畑状遺構・水田といった生産関連遺構が検出されている。これらの発掘調査の結果から遺跡範囲南西部では、弥生時代前期～近世に至る遺構・遺物が重層的に検出され、沖積低地に特有の河川堆積物の累重により形成された不安定な微地形を積極的に活用した、各時期の集落の広がりが確認されている。なお地理・歴史的環境の詳細については「本書Ⅰ-第2章」を参照されたい。

本書で報告する久宝寺遺跡第46次調査(KH2002-46)は、電華東西線1-1工区(南)建設に伴って実施した発掘調査である。発掘調査は八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき実施した。調査は「大阪電華都市拠点地区における埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」に基づいて、都市基盤整備公団関西支社、(財)八尾市文化財調査研究会とによる業務委託契約書の締結後、現地調査に着手した。



第1図 調査地位置図 (S=1/6000)

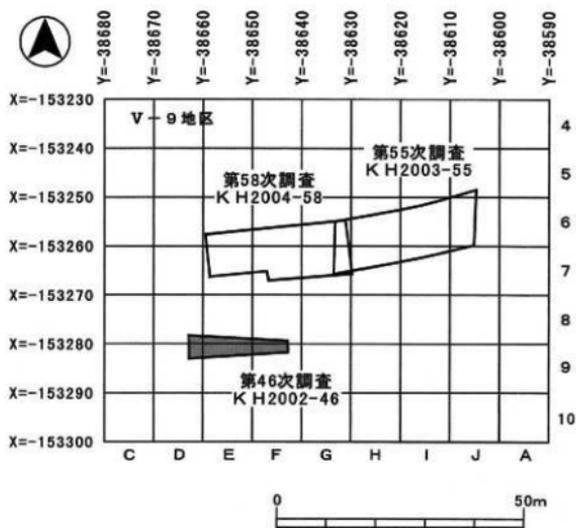
第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、旧国鉄の竜華操車場跡地とその周辺で計画された「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業」の竜華東西線1-1工区(南)建設に伴うもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第46次調査にあたる。

調査地点は竜華操車場跡地の西側に位置している。調査地平面形は東西に長い台形(東西20.0m、南北2.4~4.8m)を呈し、調査面積は72.0㎡を測る。

調査区全域の地区割については、竜華操車場跡地周辺を含む東西2km、南北1kmにわたって、国土座標第VI系〔日本測地系〕(原点-東経136°00′、北緯36°00′・福井県越前岬付近)を基準として設定した大区画・中区画・小区画を使用した。この地区割基準は、竜華操車場跡地内において平成9年度以降に継続する発掘調査に対応する為に、本調査研究会が独自に設定したものである。大区画は500m四方で全体を8区(I~Ⅷ)に区分し、北西隅の区画をIとし南東隅をⅧと呼称した。中区画は大区画を100m単位に25区(1~25)に区分し、北西隅の区画を1とし南東隅を25と呼称した。小区画は中区画を10m単位に区画し、地区の呼称については、東西方向はアルファベット(西からA~J)、南北方向は算用数字(北から1~10)で示し、1A地区~10J地区とした。なお個々の地点表記においては国土座標値を入れる方法を取った。(本書14頁参照)



第2図 調査区設定図 (S=1/1000)

調査は鋼矢板打設により調査区を閉鎖する方法をとり、調査区の北・西・東に土層観察用のセクション(幅0.5m)を設定している。

調査に際しては、遺跡範囲確認調査の結果から現地表下1.5m前後を機械掘削の対象範囲とした。しかし調査区東部において現地表下1.2m前後で遺構・遺物が顕著に見受けられたため、調査区東部では現地表下1.2m前後、西部では現地表下1.5m前後を機械掘削とし、以下1.2～1.5mについては人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。

調査面の呼称については、人力による調査で検出された面を上部より「第1面」とした。

遺構名は、遺構略号の後に面番号を付与し、2桁の番号と合わせて表記した。[凡例SD101]。

現地調査での平面図の作成については、2回のクレーン使用による航空写真測量(1/20・1/100)を実施した。

第2節 基本層序

当該地は調査直前まで畑として利用されていたことにより、近現代の建築物造成等の大規模な攪乱を受けておらず、地層の堆積および土地利用状況を知る上で非常に良好であった。

ここでは調査地全体を通して観察された地層を層相から18層に大別し基本層序とした。

機械掘削範囲内であったため現地表下1.1mまでの地層についての詳細は不明であるが、今回の工事の際に布設された整地上約0.6mを除去すると現代の作土層が見られ、1層の中世作土層の存在から当該地は中世以後、連続と続く耕作地であったことが窺える。2～4層は下位の自然河川が埋没した後にできた窪地に堆積したかあるいは整地された層であり、東部では2層上面、西部では自然河川の埋没砂(5層)上面で平安時代中期以前～中世の生活面が検出された。5層は古墳時代後期以後の河川堆積層である。6～9層は植物遺体を含む水成堆積層である。特に8層は草が腐らずにそのままの状態で残り、ラミナ状の炭化植物を幾重にも含む層で、西部の近畿自動車道での調査事例から古墳時代中期の生活面を覆う鍵層となっている。10層は下面に踏み込みが多く見られる非常に乱れた層である。11層以下は極細粒砂の細かいラミナの見られる粘土質シルト主体の静水堆積層であるが、15・16層はやや乱れた感を受け、16層上面が生活面であった可能性がある。周辺の調査事例から古墳時代初頭～前期に相当する層であると考えられる。12層以下は西から東へ、さらに南に緩やかな傾斜をもち、谷状地形を形成するものと思われる。この地形環境は後世の自然河川の河道となるなど、当該地の環境形成に影響を及ぼしている。

0層：盛上(層厚0.6m)および近現代耕作土など。

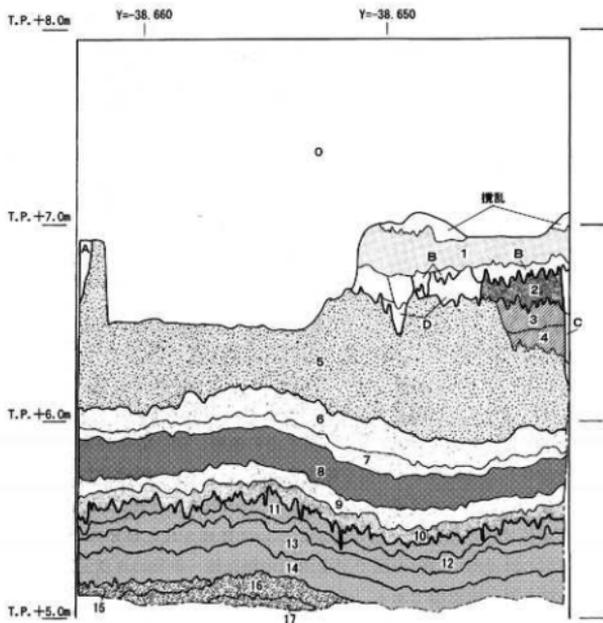
1層：2.5Y5/1黄灰色シルト混細～中粒砂(細礫少量含む)。マンガン斑含む。作土層。層厚0.25m以上。

2層：2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂少量混細粒砂質シルト。管状酸化鉄・マンガン斑を含む。層厚約0.2m。土壌化層で上面が第1面。

3層：2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂少量混シルト(やや粘質)。斑状酸化鉄を含む。層厚最大0.2m。

4層：10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト。10Y5/1灰色極細粒砂の細かいラミナを含む。層厚約0.15m。

5層：5Y5/1灰色細粒砂～細礫。ラミナあり。腐植土ラミナが多く見られる。層厚0.85m以上。



- 0層 表土(層厚0.6m) および近現代耕作土など
 - 1層 2.5Y5/1黄灰色シルト混濁～中粒砂(細砂少量含む) マンガン斑 作土層
 - 2層 2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂少量混濁細粒砂質シルト 管状炭化鉄・マンガン斑 土壌化層 上面が第1面
 - 3層 2.5Y4/2暗灰黄色極細粒砂少量混濁シルト(やや粘質) 斑状炭化鉄
 - 4層 10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト 10Y5/1灰色極細粒砂の細かいラミナ
 - 5層 5Y5/1灰色細粒砂～細砂 ラミナ 腐植土ラミナ多
 - 6層 10Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混濁土質シルト 10Y5/1灰色極細粒砂の細かいラミナ 少量 上面が第2面
 - 7層 10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト
 - 8層 5Y2/1黒色シルト質粘土 腐植物の炭化有機物ラミナを含む 少量
 - 9層 5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト 植物遺体ラミナを少量 炭酸鉄少量
 - 10層 5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土 斑状炭化物を含む非常に乱れた層
 - 11層 10Y4/1灰色粘土質シルト 炭化物ラミナ 上面が第3面
 - 12層 7.5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混濁シルト 極細粒砂の細かいラミナ
 - 13層 7.5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト 植物遺体少量
 - 14層 10Y4/1灰色極細粒砂混濁土質シルト 上面に植物遺体ラミナ
 - 15層 10Y4/1灰色極細粒砂質粘土質シルト
 - 16層 10Y4/1灰色極細粒砂少量混濁シルト質粘土 炭酸鉄多
 - 17層 10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト 炭化物ラミナ 炭酸鉄
- A 2.5Y5/2 暗灰黄色極粒砂～細粒混シルト質細粒砂
 - B S D101～104 を含む耕作層
 - C S K102
 - D S D106

第3図 基本層序

- 6層：10Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルト。10Y5/1灰色極細粒砂の細かいラミナを含む。そのままの葦を少量含む。層厚約0.3m。上面が第2面。
- 7層：10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト。層厚約0.1m。
- 8層：5Y2/1黒色シルト質粘土。幾重もの炭化有機物ラミナを含む。そのままの葦を多量に含む。層厚約0.4m。
- 9層：5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト。植物遺体ラミナを少量含む。炭酸鉄を少量含む。層厚約0.1m。
- 10層：5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土。斑状炭化物を含む非常に乱れた層で下面に踏み込みが多く見られる。層厚約0.1m。
- 11層：10Y4/1灰色粘土質シルト。炭化物ラミナを含む。層厚約0.15m。上面が第3面。
- 12層：7.5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混シルト。極細粒砂の細かいラミナを含む。層厚約0.1m。
- 13層：7.5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト。植物遺体を少量含む。層厚約0.15m。
- 14層：10Y4/1灰色極細粒砂混粘土質シルト。上面に植物遺体ラミナを含む。層厚約0.15m。
- 15層：10Y4/1灰色極細粒砂質粘土質シルト。層厚0.05m以上。
- 16層：10Y4/1灰色極細粒砂極少量混シルト質粘土。炭酸鉄を多く含む。層厚0.15m以上。
- 17層：10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト。炭化物ラミナを含む。炭酸鉄を含む。層厚0.05m以上。

第3節 検出遺構と出土遺物

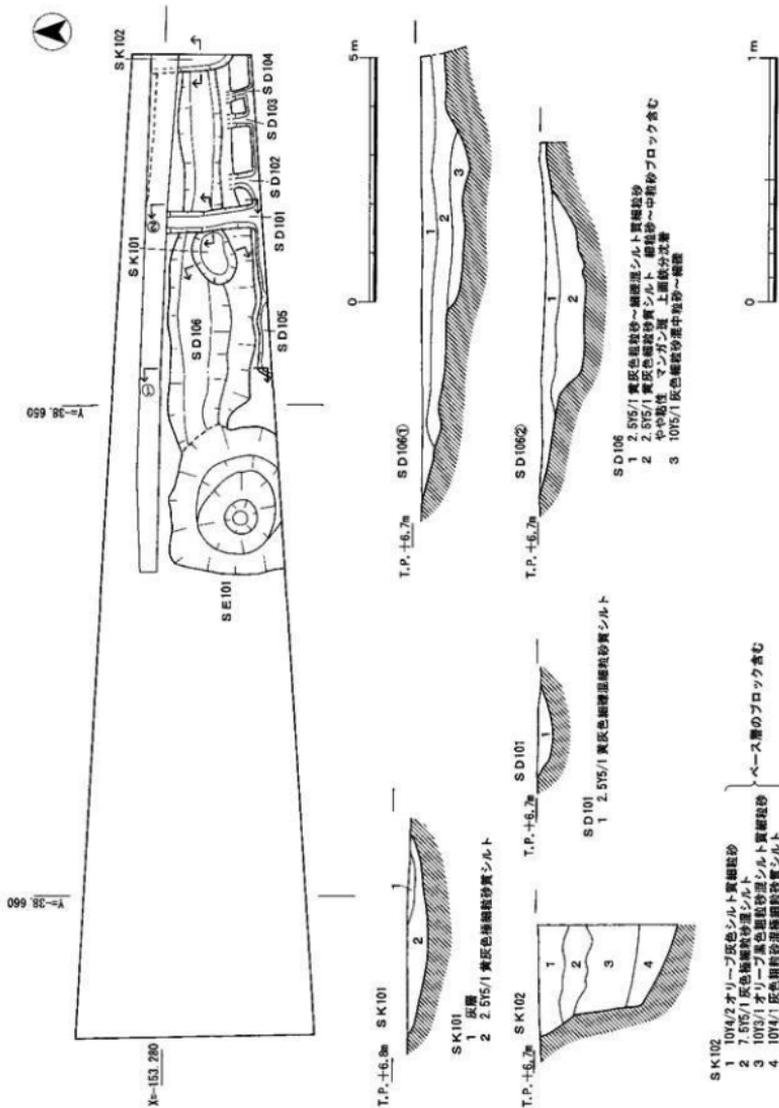
〈第1面〉

2・5層上面(T.P.+6.8~6.9m)で井戸1基(S E 101)、土坑2基(S K 101・102)、溝6条(S D 101~106)を検出した。同一面上での検出であるが、断面観察および遺構の性格を考慮すると3時期に分けられる。S E 101・S D 106→S K 101・102→S D 101~105となり、S E 101・S D 106は奈良時代前半~平安時代中期、S K 101・102は平安時代前期、S D 101~105は中世と考えられる。

井戸 (S E)

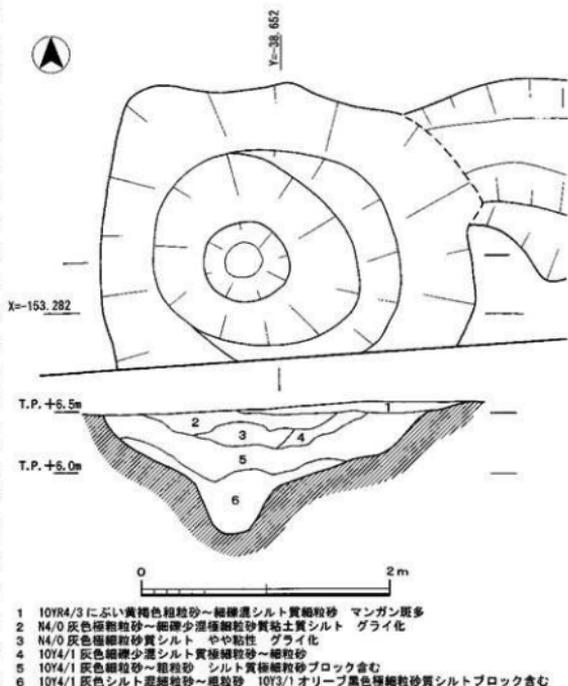
S E 101

V-14-9 E 地区で検出した。機械掘削により本来の遺構構築面は削平されている。南部は調査区外に至るが、平面形状は東西に長い長方形と思われる。規模は検出面で東西幅3.0m・南北幅2.2m以上・深さ1.1mを測る。断面形状は上面から約0.7mまでは緩やかな傾斜をもち、平面中央付近の直径約0.7mがほぼ垂直に掘り窪められている。底部は自然河川の埋没砂(基本層序5層)を越えて粘土質シルト層(基本層序9層)まで掘削が達している。井戸側の痕跡は確認できなかった。これらのことから当遺構は、井戸というよりは水溜としての機能が強いように思われる。埋土は6層に分けられ、灰色系を呈し全体的に砂粒~細礫を多く含む層相である。中位以下の5・6層にはブロックが見られることから人為的に埋められたと考えられる。遺物は奈良時代の土師器・須恵器が上部の1~5層から出土している。1~3を図化した。1は土師器杯で、口縁部の約1/3が欠損している。法量は口径14.6cm・器高2.6cmを測る。暗文は口縁部内面に底部との境から発する右上がりの斜放射暗文を施す。底部内面は不明瞭であるが外巻螺旋暗文であろう。調整は口縁部ヨコナデ、底部外面ヘラケズリで、外面にヘラミガキを施さないb0手法である。色



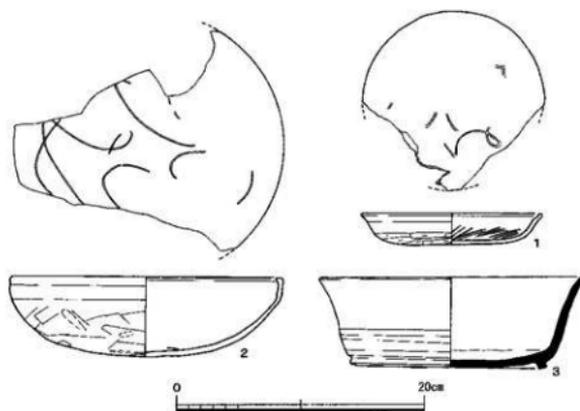
第4図 第1面平面図・遺構断面図

調は灰黄褐色である。平城宮杯A IVにあたり、時期的には8世紀前半後葉の平城宮土器Ⅲに比定できる。2は精製の土師器鉢で、復元口径22.2cm・器高6.6cmを測る。底部部内面に螺旋暗文を施す。調整は口縁部ヨコナデ、底部部外面ヘラケズリで、底部外面にわずかに指頭圧痕が残る。色調は淡黄褐色を呈する。3は須恵器杯身である。口縁部の約1/2が欠損している。法量は口径21.4cm・器高7.4cm・高台径16.0cm・高台高0.5cmを測る。底が歪み底部中央がわずかに接地する。平城宮杯B Iにあたる。色調は淡灰色～灰白色。2・3の時期は明確ではないが、1と同時期頃として差し支えないもので、奈良時代中葉が遺構廃絶時期と考えられる。



- 1 10YR4/3 に近い黄褐色粗粒砂～細粒混シルト質細粒砂 マンガン居多
- 2 N4/0 灰色極細粒砂～細粒少湿極細粒砂質粘土質シルト グライ化
- 3 N4/0 灰色極細粒砂質シルト やや粘性 グライ化
- 4 10Y4/1 灰色極細少湿シルト質極細粒砂～細粒砂
- 5 10Y4/1 灰色極細砂～粗粒砂 シルト質極細粒砂ブロック含む
- 6 10Y4/1 灰色シルト混細粒砂～粗粒砂 10Y3/1 オリーブ黒色極細粒砂質シルトブロック含む

第5図 SE 101 断面図

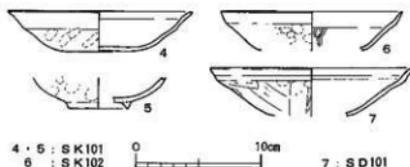


第6図 SE 101 出土遺物

土坑 (SK)

SK101

V-14-9F地区で検出した。東部はSD101によって切られる。平面形状は東西に長い楕円形を呈し、検出面で長径1.1m・短径0.8m・深さ0.08mを測る。埋土は2層から成り、上層は灰層、下層は2.5Y5/1黄灰色極細粒砂質シルトである。遺物は土師器、黒色土器A・B類、平瓦が出土している。土師器碗(4・5)を図化した。4は復元口径14.8cm・器高3.4cm、5は復元高台径4.8cm・高台高0.5cmを測る。共に明褐色を呈し、砂粒を多く含む胎土である。时期的には平安時代前期頃が考えられる。



第7図 SK101・102、SD101出土遺物

SK102

V-14-9F地区で検出した。平面形状は東・北部が調査区外に至るため詳細は不明であるが、南北に長い楕円形と推測できる。上部は中世の耕作溝(SD101~104と同時期のもの)によって削平されている。規模は調査区北壁断面で確認できる部分を合成すると、長径1.65m以上・短径0.4m以上・深さ0.6mを測る。掘方は垂直近くに掘り込まれている。埋土はほぼ水平堆積を呈する4層に分けられ、すべてブロック状を成す層相であり人為的に埋められている。遺物は土師器が少量出土しており6を図化した。6は土師器碗で、復元口径14.6cmを測るが小片のためやや不確定である。4・5とは異なり砂粒をあまり含まない精良な胎土で、色調は灰黄褐色である。

溝 (SD)

SD101~105

V-14-8F、9E・F地区で検出した。SD101~104は南北方向、SD105は東西方向に伸びる溝である。SD101~104は南端がSD105に取り付く状況である。規模は幅0.20~0.45m・深さ0.08~0.24mを測る。SD101のみ調査区を縦断することを平面的に確認したが、SD102~104についても北壁断面観察から調査区を縦断することが知れ、SD101~104は北部が調査区外に至る。またこれら4条以外にも同一機能をもった溝が数条存在することが、北壁断面観察により見て取れる。SD105は東・南が調査区外に至る。埋土はいずれも2.5Y5/1黄灰色細礫混細粒砂質シルトの単一層であり、同様の性格の溝と捉えられ、畑などの生産域に伴う溝群であると考えられる。遺物はSD101・102から土師器が少量出土している。SD101出土の7を図化した。7は土師器碗で、復元口径16.4cmを測る。胎土・色調は4・5に類似する。

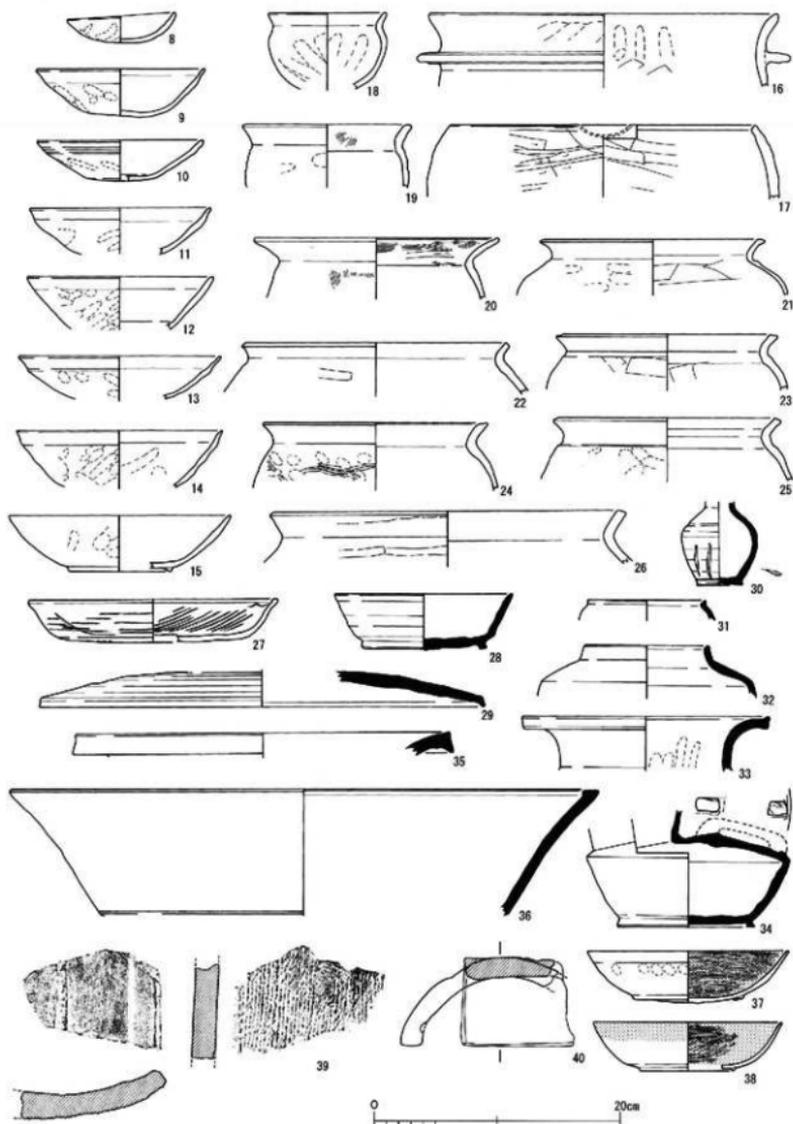
第1表 SD101~105一覧表(単位m)

遺構名	地区	検出長	幅 (最大)	深さ	幅	出土遺物
SD101	V-14-8F	1.70	0.45	0.09	2.5Y5/1黄灰色細礫混細粒砂質シルト	土師器
SD102	V-14-9F	0.40	0.30	0.10	※	土師器
SD103	※	0.40	0.30	0.08	※	
SD104	※	0.40	0.20	0.08	※	
SD105	※	6.50	0.10以上	0.24	※	

SD106

V-14-8・9 E・F 地区で検出した。SK101・102、SD101~104によって切られる。東西方向に伸びる溝で、北肩は東部では北側溝内に収まり、西部では調査区外に至る。規模は検出長8.15m・幅1.45~2.20m以上・深さ0.16~0.20mを測る。東部に向かうほど幅は狭くなる。検出状況から西部で接するSE101との有機的な関係が示唆でき、SE101をオーバーフローした水がSD106を流れる構造であった可能性が考えられる。断面形状は西部が緩やかな傾斜をなすのに対し、東部は2段に掘削され下部は傾斜がきつくなる。埋土は2~3層から成り、黄灰色~灰色を呈し全体的に砂粒~細礫を含む。ブロックを含むことから人為的に埋められたと思われる。

遺物は平安時代前~中期の土師器、須恵器、黒色土器、瓦などが多量に出土しており、8~40を図化した。8~27は土師器である。皿(8)は完形で、口径8.7cm・器高2.3cmを測る。手捏ね成形によるもので口縁部はやや波打つ。9~15は碗である。9はほぼ完形で、口径13.7cm・器高3.8cmを測る。10~15は破片で、復元口径13.4~17.8cmを測る。また15は高台を有し、復元高台径8.2cm・高台高0.3cmを測る。9・11・13・14は口縁部に強いヨコナデを施すため外面に段を生じ、また10は2条の凹線を有する。色調は9が灰黄褐色、10~15が褐色~明褐色を呈する。羽釜(16)は復元口径28.2cm・鈎径30.2cmを測る。生駒西麓産の胎土である。17は片口を有する鉢で、復元口径24.6cmを測る。18~26は甕である。18・19は小形の甕で、復元口径9.6・13.6cmを測る。20~25は中型で、復元口径18.0~21.5cm、26は大形で、復元口径28.6cmを測る。20は長い口縁部から端部が内側に肥厚するもので、口縁部・体部にハケ調整を施す。21~26は短い口縁部で、強いヨコナデにより体部との境に段を成すものである。口縁部はやや肥厚し、外傾する平面・凹面を成すものが多く、24のみ内傾する凹面を成す。20が精良な胎土、他は砂粒を含む胎土である。27は杯で、復元口径20.2cm・器高3.5cmを測る。平城宮杯A IIにあたり、内面に内巻螺旋暗文・斜放射暗文・連珠暗文を施す。調整はb1手法で、口縁部外面にヘラミガキを加え、底部外面はヘラケズリを施すが指頭圧痕が残る。精良な胎土で、色調は淡黄褐色である。28~36は須恵器である。杯身(28)は口径14.4cm・器高4.6cm・高台径10.1cm・高台高0.6cmを測る。全体に薄く灰が被り、底部中央が接地する他、高台部にひび割れが生じている。皿蓋(29)は復元口径36.2cmを測る。胎土中に砂粒(~2mm)を多量に含んでいる。30は壺で口縁部以外完存である。体部最大径6.1cm・底径3.7cmを測る。全体に薄く灰が被り、体部外面に縦平行線、その裏面に横線のヘラ記号を有し、底部は回転糸切り痕が残る。31は小型の鉢あるいはミニチュア短頸甕と考えられるが詳細は不明である。復元口径9.4cmを測る。口縁部~肩部外面に灰が被る。32は須恵器短頸甕で、復元口径10.2cmを測る。蓋を被せて焼成しており、肩部外面中位以下に自然釉が掛かる。33は広口壺で復元口径20.0cmを測る。口縁部外面の回転ナデはカキ目風で、条線が明瞭である。34は平瓶で、口縁部及び断面長方形の提梁が欠損する。体部径16.4cm・高台径11.1cm・高台高0.4cm・頸部径7.0cmを測る。上面に自然釉が掛かる。奈良時代後期に比定される。35は甕の小片で、復元口径30.6cmを測る。口縁部内面に灰が被る。36は盤の小片で、復元口径48.0cm・残存高10.3cmを測る。焼成不良で灰白色を呈する。37・38は黒色土器である。共にA類碗で、38は口縁部外面まで黒色を呈する。各法量は復元口径16.3・15.2cm、器高4.1・4.0cm、復元高台径8.8・7.6cm、高台高0.4・0.3cmを測る。共に内面はヘラミガキで、外面は磨耗のため不明である。瓦は平瓦2点、丸瓦1点が出土しており平瓦(39)・丸瓦(40)を図化した。39は凹面布目、凸面縄目タタキ、側端部はヘラケズリで上下角を面



第 8 图 S D 106 出土遺物

取りする。胎土密で焼成良好。40は凹面布目、側端部ヘラケズリで内側角を面取りする。胎土密で焼成不良。

これらの遺物は時期的に平安時代前期まで(10世紀代まで)に比定されるものであり、この頃に当溝が埋められたことが看取される。なお検出当初はS E 101と一連の遺構として掘削しており、出土遺物中にはS E 101に帰属するものが含まれていると捉えられる。土師器では杯(27)、須恵器では杯身(28)等が奈良時代前期に比定されるもので、これらがS E 101の遺物と考えられる。

〈第2面〉

6層上面(T.P. +5.9~6.1m)で自然河川1条(NR201)を検出した。

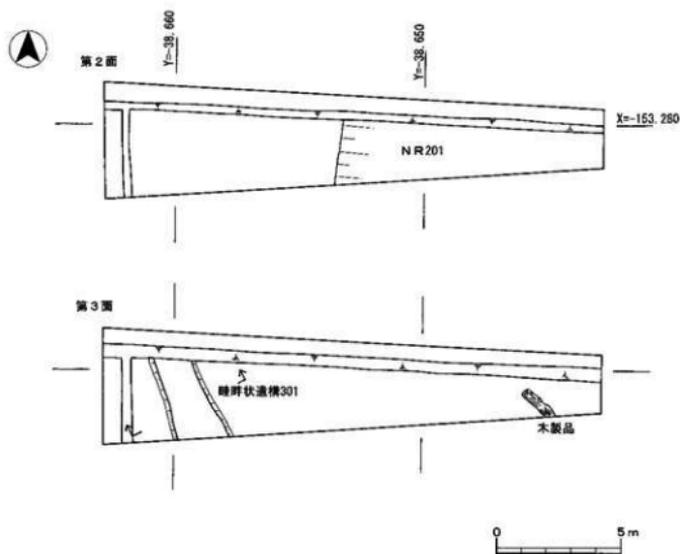
自然河川(NR)

NR201

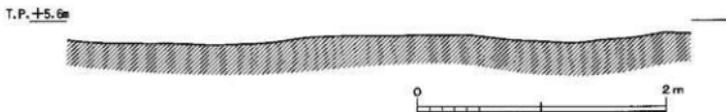
V-14-8・9 E・F地区で、南北方向に伸びる自然河川の西屑を検出した。南・北部ともに調査区外に至る。基本層序5層を構成する自然河川の初期段階の流路と捉えられる。規模は検出長1.6~2.7m・幅10.1m以上・深さ0.2m以上を測る。遺物は出土していないが、層位的な関係から時期は古墳時代後期以後と考えられる。

〈第3面〉

11層上面(T.P. +5.4~5.7m)で畦畔状遺構1条(畦畔状遺構301)と木製品1点を検出した。調査



第9図 第2・3面平面図



第10図 畦畔状遺構301断面図

区西部でT.P. +5.7mであった標高は中央東よりでT.P. +5.4mまで下がり、東部に向かって徐々に上がる。全体としてはさらに南へと落ち込む一種の谷地形的様相を見せる。また11層上面には調査区全体に10層中からの踏み込みが多く見られ、10層も非常に乱れている。当時の当該地は湿地帯であったと考えられるが、何らかの人為的活動が行われていたと思われる。時期は層位的関係から古墳時代中期と考えられる。

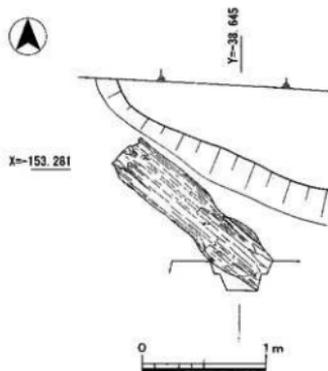
畦畔状遺構（畦畔状遺構）

畦畔状遺構301

V-14-8 D・E、9 E地区で検出した。南北方向に伸びるもので、南・北は調査区外に至る。調査区西部の標高が一番高い所に位置する。構築に際しては左右に幅広い溝を掘ることによって作り出されている。規模は検出長3.3m・幅1.7~2.1mで、溝底からの高さは最大0.16mを測る。両側に作土層が認められないことから水田に伴う畦畔とは考えられず、道路として利用されていたものであろうか。

木製品（図版8）

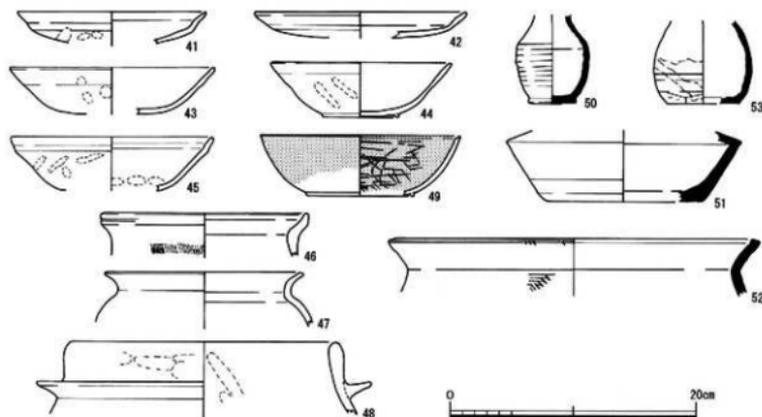
V-14-9 F地区で検出した。南部は調査区外に至る。平面はほぼ長方形を成し、短軸方向にやや湾曲する板材である。寸法は残存長1.54m・幅0.31~0.40m・厚さ約0.03mを測る。南西方向に落ち込む傾斜部で、凹面を上に向けて遺構面よりやや浮いた状態（基本層序10層内）で出土した。側面は面取りされているようである。現段階ではその用途等は不明である。



第11図 第3面木製品出土状況

〈第4層出土遺物〉

第4層からは土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器が出土しているが、第1面検出時に出土した遺物であり、SE101・SD106に帰属するものが多いと考えられる。41～48は土師器である。41・42は皿で、復元口径15.2・17.2cmを測る。41は強いヨコナデにより口縁部が外反し、底部外面は指頭圧痕による凹凸が著しい。共に砂粒を多く含む胎土で、42には径6mmを測る礫が認められる。色調は褐色・明褐色である。43～45は椀で、復元口径は15.6・14.7・16.4cm、45は器高4.5cm・高台径6.2cm・高台高0.3cmを測る。45は口縁端部が煤けている。3点とも砂粒を多く含む胎土で、色調は褐色・淡褐色・褐色である。46・47は甕で、復元口径16.8・16.1cmを測る。46は外反した口縁部から端部が上方に伸びるもので、体部外面はタテハケを施す。砂粒を多く含む胎土である。47は砂粒をわずかに含む精良な胎土である。48は羽釜で復元口径21.8cm・鐙径27.1cmを測る。生駒西麓産の胎土である。49は黒色土器A類椀で、復元口径16.2cm・器高5.0cm・復元高台径8.7cm・高台高0.3cmを測る。A類であるが内面～体部外面中位まで黒色を呈する。内面ヘラミガキで、口縁端部内面に凹線を有する。10世紀初頭頃に位置付けられる。50～52は須恵器である。50は壺で、体部最大径5.9cm・底径3.8cmを測る。底部糸切りで、体部外面は回転ナデによる凹凸が明瞭に認められる。焼成は不良である。51は平瓶体部の小片で、復元体部径19.0cmを測る。肩部に灰が被る。52は甕の小片である。肩部に平行タタキが認められる。53は灰釉陶器壺である。復元体部最大径8.0cm・底径5.8cmを測る。肩部～体部中位に明緑色の釉を掛けており、一部が底部付近まで至っている。底部は糸切りである。胎土は灰白色。これらの遺物の時期は概ね10世紀前半頃までに比定される。



第12図 第4層出土遺物

第4章 まとめ

今回の久宝寺遺跡第46次調査(KH2002-46)は道路建設に伴う調査である。周辺の調査事例をふまえて今回の調査成果を概観してみる。

当該地の鍵層である古墳時代中期の生活面を覆う基本層序8層を除去すると、踏み込みが多く見られる湿地帯が現れる。西部の近畿道の調査では水田面が検出されているが、当調査地は東部へと落ち込む谷地形との境であったと思われる。NR201は古墳時代後期頃から当地の谷筋を流れていた自然河川である。東部の第25次調査(KH98-25)や第36次調査(KH2000-36)、西部の近畿道の調査において古墳時代後期の水田面が検出されており、この河川(NR201)の後背湿地を生産域として利用していたと思われる。NR201が埋没した後は古代の生活面が形成される。SE101やSD106は生産域に関わる遺構であったと思われる。これらは整地のために平安時代中期までには埋められてしまう。周辺での古代の様相は、近畿自動車道の調査で奈良時代の集落域が、東部の第37次調査(KH2001-37)では古代の水田面が検出されている。中世以後は主として生産域として利用され、現代まで連続と続く耕作地であったことがわかる。

狭長な調査地であるにもかかわらず、当該地周辺の調査では事例の少ない平安時代中期以前の遺構・遺物の検出という新たな知見を見出すことができた。当遺跡西部の古代における土地利用を考える上で重要な成果であったといえる。

註記

- 註1 原田昌則 2004『Ⅱ久宝寺遺跡(第36次調査)』『久宝寺遺跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告77』(財)八尾市文化財調査研究会
註2 原田昌則・金親満夫 2004『Ⅲ久宝寺遺跡(第37次調査)』『久宝寺遺跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告77』(財)八尾市文化財調査研究会

参考文献

- ・古代の土器研究会編 1992『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』
- ・古代の土器研究会編 1993『古代の土器Ⅱ 都城の土器集成』
- ・近江俊秀・岡田清一 1989「河内中南部における古代末期から中世の土器の諸問題—木の本遺跡SW-02出土遺物を中心として」『八尾市文化財紀要4』八尾市教育委員会文化財室
- ・佐藤 隆 1992「第2章 第2節 平安時代における長原遺跡の動向」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告V』(財)大阪市文化財協会

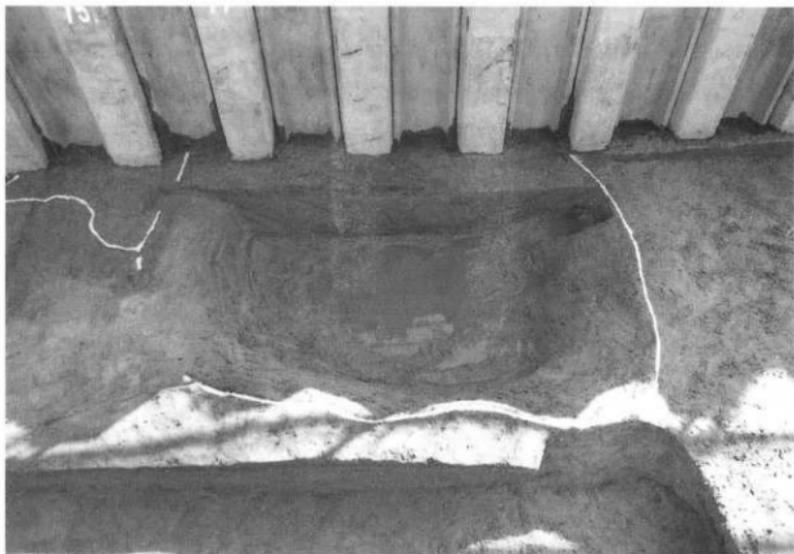
圖 版



第1面（東から）



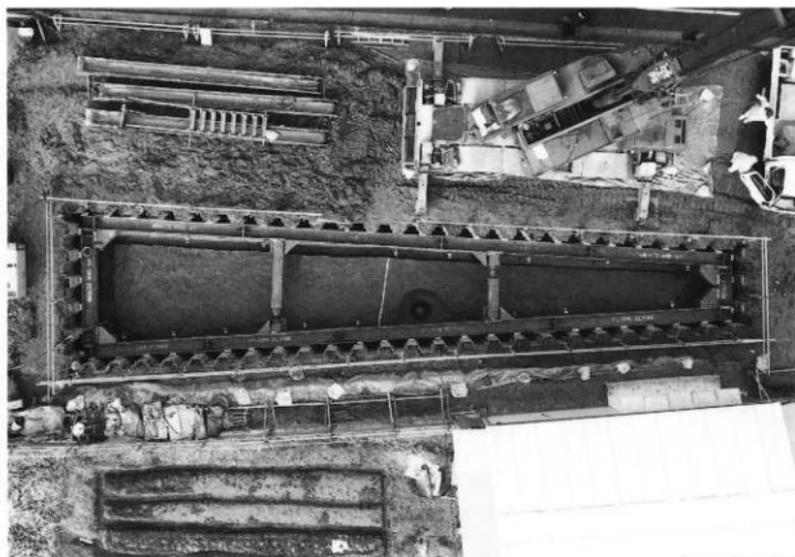
第1面東部（北西から）



S E 101 (北から)



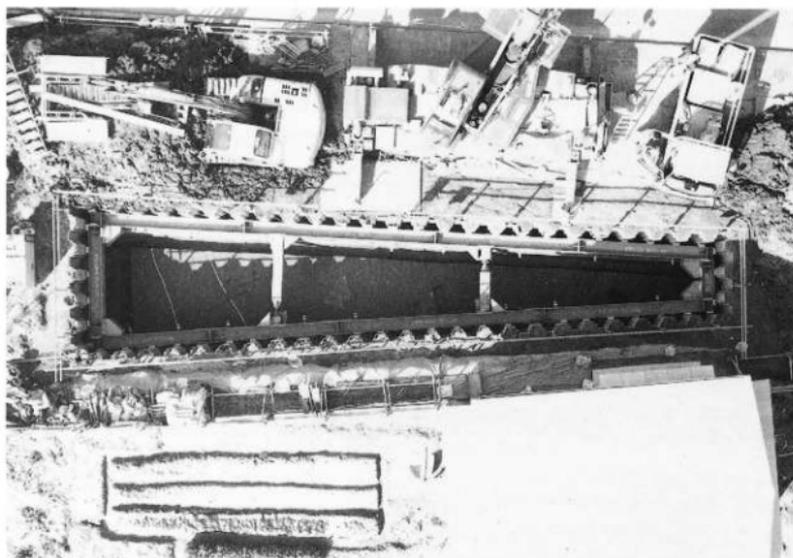
S E 101完掘 (北から)



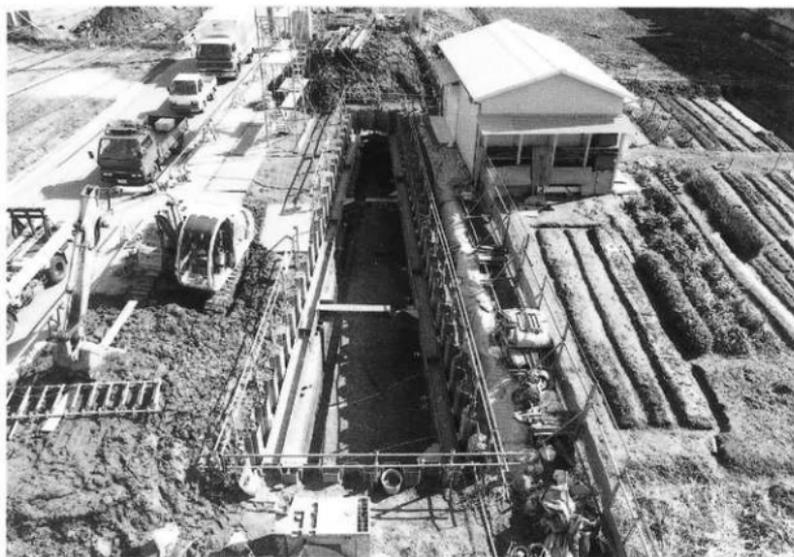
第2面（上が北）



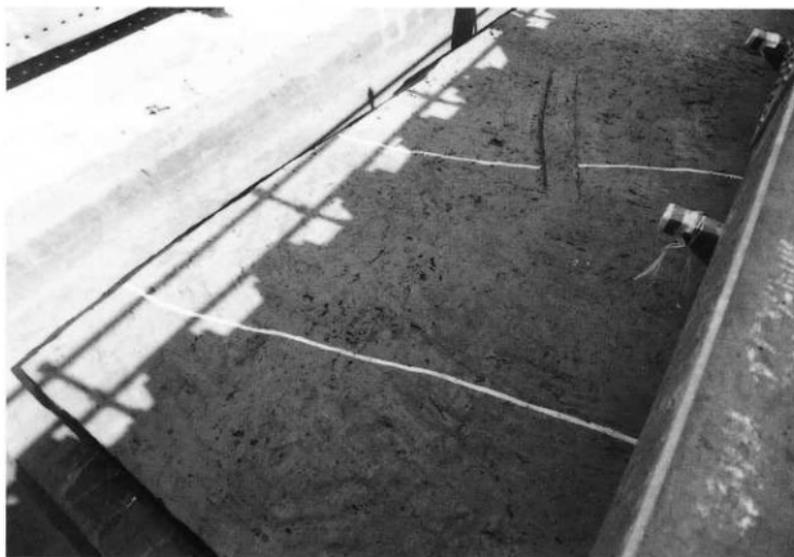
第2面東部（南西から）



第3面（上が北）



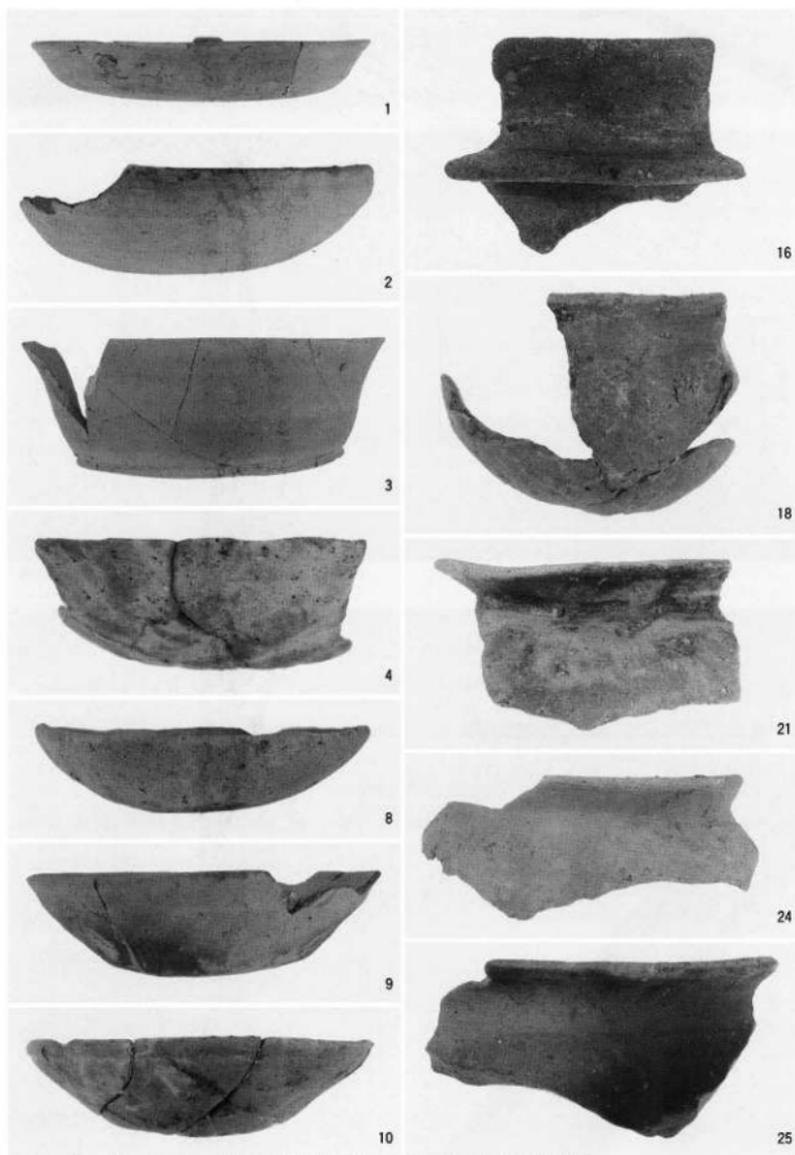
同上（西から）



畦畔状遺構301 (南西から)



第3面木製品出土状況 (北西から)



SE101 (1~3)、SK101 (4)、SD106 (8~10·16·18·21·24·25) 出土遺物